

一般国道 201 号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告 第 2 集

上片島遺跡群 6 地区

福岡県京都郡苅田町上片島所在遺跡の調査

2014

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成 20 年度から国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、国道 201 号行橋インター関連建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成 24 年度に行った、京都郡苅田町上片島に所在する上片島遺跡群の調査の記録です。

本遺跡は小波瀬川中流域の丘陵上に立地しており、今回の調査では、弥生時代～中世の遺構・遺物を確認しました。中でも弥生時代終末～古墳時代初頭のドングリピットは低地にあったこともありドングリが良好な状態で残っており、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 26 年 7 月 30 日

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

例　言

1. 本書は、一般国道201号行橋インター関連建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡苅田町上片島に所在する上片島遺跡群6地区の記録で、一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告の第2集にあたる。
2. 発掘調査および整理報告は国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は城門義廣が、遺物写真の撮影は九州歴史資料館が行った。空中写真については、東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は城門が行い、発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、城門の指導の下に実施した。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・糞島・中津・田川」を改変したものである。本書で使用する方位は、國土座標II系による座標北である。
8. 本書の執筆はⅣ章をパリノ・サーヴェイ株式会社が、その他の執筆・編集は城門が行った。

目 次

Iはじめに.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査の経過.....	1
3 調査・整理の組織.....	3
II位置と環境.....	4
III発掘調査の記録.....	11
1 遺跡の概要.....	11
2 遺構と遺物.....	11
6-1 地区	11
(1) 溝	11
(2) その他の遺構等の出土遺物	13
(3) 小結	13
6-2 地区	13
(1) 堅穴住居跡	15
(2) 土坑	20
(3) 溝	23
(4) 墳墓	24
(5) その他の遺構等の出土遺物	24
(6) 小結	25
6-3 地区	27
(1) 堅穴住居跡	27
(2) 溝	29
(3) その他の遺構等の出土遺物	29
(4) 小結	29
6-4 地区	30
(1) 土坑	30
(2) 溝	39
(3) その他の遺構等の出土遺物	41
(4) 小結	46
IV科学分析.....	47
Vまとめ.....	57
1 周辺地形について.....	57
2 ドングリビットについて.....	58

図版目次

- 文中図版1 イチイガシ 果実
文中図版2 アカガシ・ツクバネガシ 果実
文中図版3 種実遺体
- 図版1 上片島遺跡群周辺航空写真（上から）
図版2 1 調査区全景（北から） 2 調査区全景（南から）
図版3 1 6-1 地区全景（南から） 2 6-1 地区西壁（東から）
3 6-2 地区全景（上から）
図版4 1 6-2 地区 1 号住居跡北壁（南西から） 2 6-2 地区 1・5 号住居跡（東から）
3 6-2 地区 2 号住居跡カマド（南から）
図版5 1 6-2 地区 2 号住居跡（東から） 2 6-2 地区 6 号住居跡（東から）
3 6-2 地区 3 号土坑出土状況（東から）
図版6 1 6-2 地区 4 号土坑（南西から） 2 6-2 地区 5 号土坑出土状況（北東から）
3 6-2 地区 5 号土坑（北東から）
図版7 1 6-2 地区西壁（東から） 2 6-3 地区全景（上から）
3 6-3 地区南壁（北東から）
図版8 1 6-3 地区 1 号住居跡カマド（東から） 2 6-3 地区 1 号住居跡出土状況（東から）
3 6-3 地区上段試掘トレンチ（北から）
図版9 1 6-4 地区全景（上から） 2 6-4 地区 1 号土坑（東から）
3 6-4 地区 2 号土坑ドングリ出土状況（東から）
図版10 1 6-4 地区 2 号土坑（東から） 2 6-4 地区 3 号土坑（西から）
3 6-4 地区 5 号土坑（東から）
図版11 1 6-4 地区 6 号土坑（東から） 2 6-4 地区 8 号土坑ドングリ出土状況（東から）
3 6-4 地区 7・8 号土坑（東から）
図版12 1 6-4 地区 9 号土坑出土状況（北西から） 2 6-4 地区 9 号土坑（西から）
3 6-4 地区 10 号土坑（東から）
図版13 出土遺物①
図版14 出土遺物②
図版15 出土遺物③
図版16 出土遺物④

挿図目次

第1図	上片島遺跡群の位置	1
第2図	国道201号行橋インター関連路線図と調査地点位置図(1/25,000)	2
第3図	周辺遺跡分布図(1/70,000)	5
第4図	上片島遺跡群周辺地形図(1/3,000)	9
第5図	上片島遺跡群6地区区割図(1/500)	10
第6図	6-1・2地区遺構配置図(1/200)	12
第7図	6-1地区西壁土層実測図(1/60)	13
第8図	6-1地区出土土器実測図(1/3)	14
第9図	6-2地区基本土層	15
第10図	6-2地区1～4、7号住居跡実測図(1/60、1/30)	16
第11図	6-2地区1～3、5、6号住居跡出土土器実測図(1/3)	17
第12図	6-2地区5・6号住居跡実測図(1/60)	18
第13図	6-2地区1～3号土坑実測図(1/30)	19
第14図	6-2地区4号土坑実測図(1/30)	20
第15図	6-2地区1、3、4号土坑出土土器実測図(1/3)	22
第16図	6-2地区2、4号溝出土土器実測図(1/3)	23
第17図	6-2地区5号土坑実測図(1/20)	24
第18図	6-2地区その他の遺構、包含層出土土器実測図(1/3、12～15は1/4)	25
第19図	6-3・4地区遺構配置図(1/200)	26
第20図	6-3地区南壁土層実測図(1/60)	27
第21図	6-3地区1号住居跡実測図(1/60、1/30)	28
第22図	6-3地区1・2号溝実測図(1/60)	28
第23図	6-3地区出土土器実測図(1/3)	30
第24図	6-4地区1～6号土坑実測図(1/40)	32
第25図	6-4地区1号土坑出土土器実測図(1/3)	33
第26図	6-4地区2～6号土坑出土土器実測図(1/3)	35
第27図	6-4地区7～10号土坑実測図(1/40)	36
第28図	6-4地区7～10号土坑出土土器実測図(1/3)	38
第29図	6-4地区1号溝出土土器実測図(1/3)	40
第30図	6-4地区5号溝出土土狀況実測図(1/40)	41
第31図	6-4地区3～5号溝出土土器実測図(1/3)	41
第32図	6-4地区その他の遺構出土土器実測図(1/3)	42
第33図	6-4地区包含層出土土器実測図①(1/3)	43
第34図	6-4地区包含層出土土器実測図②(1/3)	44

第35図	6地区出土特殊遺物実測図①(1~3は2/3、4~7は1/2、8は1/3)	44
第36図	6地区出土特殊遺物実測図②(1/3)	45
第37図	出土ドングリの大きさ	52
第38図	上片島遺跡群6地区周辺地形復元図(1/500)	56
第39図	春日市門田遺跡遺構配置図(1/300、井上編1979より転載)	59

表目次

第1表	国道201号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧	2
第2表	上片島遺跡群6地区出土特殊遺物一覧表	46
第3表	種実同定結果	48
第4表	出土ドングリの大きさ	48
第5表	県内検出ドングリピット一覧表	57

I はじめに

1 調査に至る経緯

一般国道 201 号は、福岡県福岡市から京都府苅田町を結ぶ福岡県中央部の横断幹線道路である。当路線は、福岡市東区の松島交差点を起点として飯塚市、田川市、行橋市等を経由し、苅田町二崎交差点に至る路線で、総延長約 64km を測る。江戸時代には街道として整備され、特に飯塚から福岡までの西半は篠栗街道と呼ばれ多くの往来があったほか、みやこ町勝山から仲哀岬を経て、香春、糸田、庄内付近までは古代の官道とほぼ重なっている。明治以降には筑豊の石炭産業を支える幹線道路としての役割を果たしてきた。昭和 30 年代には石炭産業から石油産業への転換に伴い産業基盤の衰退が見られる

ものの、国道 3 号と 10 号を結ぶ主要幹線道路としての機能は今もなお続いている。2009 年の飯塚庄内田川バイパスの全線開通に伴い、八木山バイパス、鳥尾トンネル、新仲哀トンネルを経て越えをせずに走破できるようになっている。

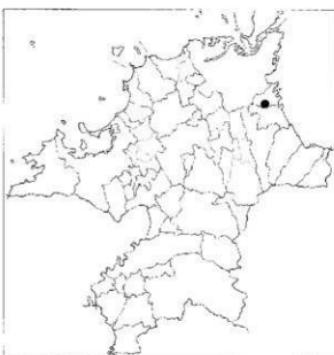
一般国道 201 号行橋インター関連は、国道 201 号の終点部に位置し、国道 10 号と連絡している。行橋市及び苅田町市街地部の交通混雑の緩和並びに建設中の東九州自動車道や新北九州空港、苅田港などと筑豊地域とを連結する重要な路線として、平成 12 年度に事業着手された総延長 4.5km の区間である。

路線全体の経緯に関しては、「一般国道 201 号行橋インター関連関係埋文化財発掘調査報告第 1 集 延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅰ」に詳しいため、ここでは本書で報告を行う上片島遺跡の調査に至る経緯について以下に纏める。

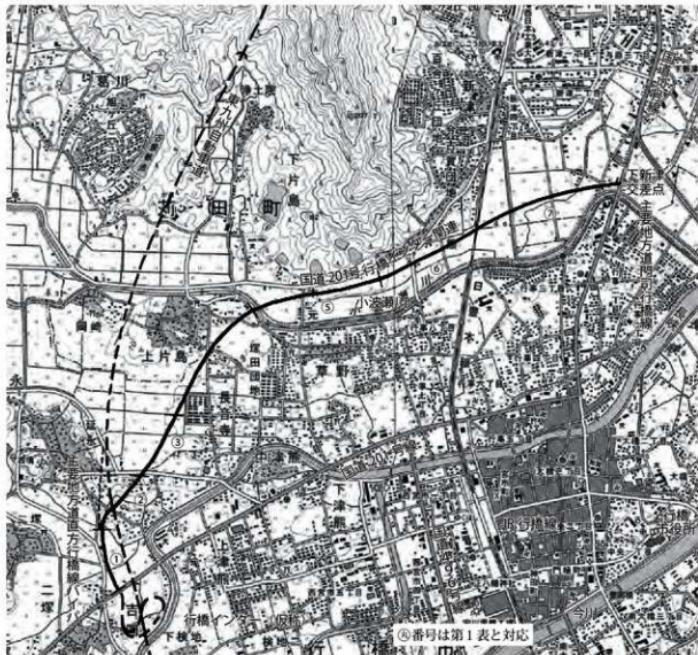
上片島遺跡群については平成 22 年度～23 年度前半まで隨時協議などで用地の進捗状況を確認しており、工事予定との調整や進入路の確保などが済んだ平成 24 年度から調査に着手することとなった。用地のはば半分が丘陵上にかかっており、周知の埋文化財包蔵地であることから、低地の水田以外は、試掘調査を行わず調査に着手することになった。

2 調査の経過

本調査地点は水路に挟まれた丘陵上ならびに低地部の水田であり、重機が侵入できなかったため、工事用道路が付近まで完成するの待ち、平成 24 年 5 月より調査を開始した。当初は、先に述べたように、現地形から水路に挟まれた丘陵上のみに遺跡が展開しているものと考えていたが、先行して行った 5 月 11 日の試掘調査において、低地の水田部分でも遺構が確認されたため、そのまま表土剥ぎを開始した。水路や町道によって分断されている部分があることから 6-1～4 地区まで細分し、順に調査を進めることとした。重機で丘陵上の 6-2 地区を掘削すると、こちらも予想に



第 1 図 上片島遺跡群の位置



第2図 国道201号行橋インター関連路線図と調査地点位置図 (1/25,000)

第1表 国道201号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧

地點	道路名	所在地	地点範囲	回答 (H20.7.10)	試掘年度	発掘調査面積	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	その後の対応
1		行橋市大字古国	行橋インター交差点(現国道201号、終点)~山崎川	道路なし	H19・20					道路なし
2	延永ヤヨミ回遊路	行橋市大字古国・延永	山崎川~県道直方行橋線	発掘調査		約19,000m ²	H20~25	H24~26	第1集	発掘調査
3		行橋市大字古国	県道直方行橋線~長音寺園地	要試掘調査	H21					道路なし
4	上片島遺跡群	行橋市大字延永 京都府京田町上片島	長音寺園地~小波瀬川	要確認調査	H24	約900m ²	H24	H26	未審	発掘調査
5		京都府京田町上片島	小波瀬川~都市計画道路 琵琶行橋線	要試掘調査	H21					道路なし
6		京都府京田町下片島	都市計画道路琵琶行橋線~ JR日豊本線	要試掘調査	H22					道路なし
7		京都府京田町新津	JR日豊本線~国道201号接続部(下新津ランプ、始点)	要試掘調査	H23					道路なし

反し、調査範囲の中央部から東側並びに北側にかけて落ちが認められ、盛土により地形が変わっていることが判明した。また、丘陵上の調査範囲は細長いため、北側では安全に表土剥ぎを行うことが困難であった。そのため、6-2地区の北側中央部に重機によるトレンチを掘削した。トレンチにおいて遺構面が確認できなかったため、南側半分のみ調査を行っている。5月22日には建機搬入並びに人力での掘削を開始し、同24日には6-1地区の掘削が終了した。同日に6-3地区的宅地と水田間の丘陵上にトレンチを入れたがここでも遺構等は発見されなかつた。翌25日には6-4地区にトレンチを掘削したところ、土坑などが検出されたため、そのまま表土剥ぎを行つた。24日に6-1地区的調査が終了した後は、順次2~4区へと掘削を進めていき、6月20日にはラジコンヘリによる写真撮影を行つた。この年の6月は雨が多く、また、低地部に湧水が見られたため、毎日のように雨水の処理に追われた。6月25日からは6-2・4地区に重機を投入し、遺構が広がる部分まで拡張を行い、掘削を行つた。遺構はあまり見られなかつたものの、各地に災害を引き起こした7月3~5日の豪雨により、調査区が水没するなど水には終始悩まされた。7月6日には水抜きを続けながらの埋め戻しが終了し、試掘調査により東側には遺跡が広がらないことが確認されたことから、同10日には建機の撤収を行つた。翌日からの11~14日には、気象庁により「これまでに経験したことのないような大雨」と評されるような『北部九州豪雨』災害が発生し、県内でも多くの被害を出した。

3 調査・整理の組織

平成24年度の発掘調査関係者及び平成25・26年度の整理作業関係者は以下のとおりである。
国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所

	平成24年度	平成25年度	平成26年度		平成24年度	平成25年度	平成26年度
所長	世利正美	赤星文生	齋 敏信	専門調査員	秋田賢一	秋田賢一	猪井知明
副所長	大成和明	大成和明	福崎昌博	国土交通技官	山本陽子		
			福崎昌博	工務課長	谷川征嗣	松元勝美	松元勝美
建設監督官	松木厚廣	松木厚廣	二口卓史	専門官	児玉祐一	児玉祐一	石橋 正
調査課長	大榎 謙	森山安夫	森山安夫				
専門職	東 昌穂	東 昌穂	羽田史郎				

福岡県教育委員会（平成23年度の機構改革により、発掘調査業務は九州歴史資料館に移管）

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
教育長	杉光 誠	杉光 誠	城戸秀明
教育次長	荒巻俊彦	城戸秀明	西平田龍治
総務部長	西平田龍治	西平田龍治	川添弘人
文化財保護課長	伊崎俊秋	伊崎俊秋	赤司善彦

九州歴史資料館

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
館長	西谷 正	荒巻俊彦	杉光 誠
副館長	篠田隆行	篠田隆行	伊崎俊秋
参事（文化財調査室長）		飛野博文	飛野博文
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塙塙孝憲
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文		
企画主幹（文化財調査室長補佐）	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査（文化財調査班長）	小川泰樹	小川泰樹	秦 駿二
技術主査（保存管理班長）	加藤和哉	加藤和哉	加藤和哉
企画主査（総務班長）	長野良博	長野良博	山崎 彰
主任技師（調査・整理担当）	城門義廣	城門義廣	城門義廣

なお、発掘調査・整理報告にあたっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、北九州国道事務所、同行橋建設監督官詰所、戸田建設（株）延永作業所、苅田町教育委員会の皆様、また福岡市経済観光文化局宮井善朗氏、音波正人氏よりご協力を賜った。記して感謝いたします。

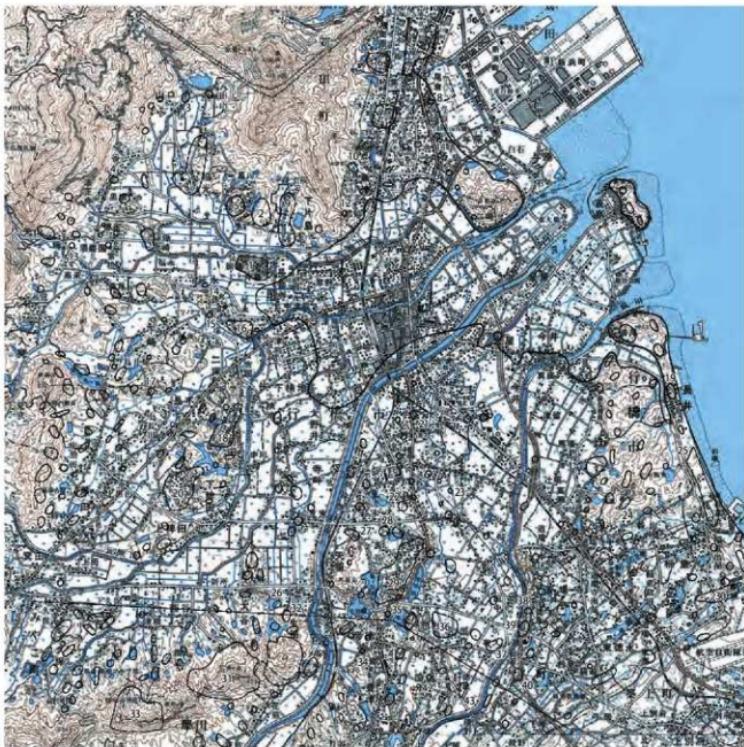
II 位置と環境

地理的環境

上片島遺跡群は福岡県東部の京都郡苅田町に位置している。苅田町は面積 46.6km²、人口 3.5 万人ほどで、東は周防灘に面しており、北及びに西は北九州市と接して、西側にはカルスト地形の貫山・平尾台山系が広がる。南は同一平野内で行橋市と接している。町内には国際貿易港である苅田港、さらに沖には北九州空港があり交通の面で発達している。このほか、沿岸部には臨海工業地帯が広がり、工業都市として栄えている。

苅田町片島は「京都平野」に属する。平野北側には平尾台山系から東・南側に向かって比較的急峻な丘陵が伸びており、平野内には段丘地形が発達している。行橋市長井地区から稻童地区にかけては、海岸沿いに標高 10m 前後の海岸段丘が見られる。河成段丘は行橋市高来、入覚、みやこ町宮原まで標高 50 ~ 90m の高位段丘が広がり、さらに盆地を取り囲むように今川・長崎川・祓川の 3 つの河川水系により形成された標高 15 ~ 30m の中位段丘が見られる。河川水系の扇状地では標高 10 ~ 15m ほどの低位段丘がみられ、特に今川周辺でよく観察される。一方で低地も平野東北部を中心として広く発達している。小波瀬川・長崎川流域では低湿な地帯が東西に広く分布しており、海岸から 5km 内陸まで標高 5m 以下の地域が広がり、10m 以下の地域も 7 ~ 8km 内陸まで広がっている。周辺では、ボーリング調査や遺跡の分布から縄文海進期や古墳時代には海が平野内部まで入り込んでいたと推測されている（第 3 図）。

上片島遺跡群は河川によって形成された独立丘陵の一つに立地している。北側を小波瀬川が東流し、南側には低地が広がっている。独立丘陵は標高 10m 前後で、周間との比高差は 1 ~ 3m ほどである。瓢箪のような形をしており、周辺分布調査の結果、丘陵全体に遺跡が分布しているものと考えられる。



1 上片島遺跡群 2 岩屋古墳群 3 山口遺跡群 4 法正寺遺跡群 5 葛川遺跡 6 南原遺跡群 7 近衛ヶ丘遺跡群 8 番塚古墳 9 済土院遺跡群 10 新津遺跡群 11 御所山古墳 12 猪俣古墳群 13 柳市魔寺 14 永水取遺跡 15 ピワノクマ古墳 16 延永ヤヨミ園遺跡 17 八雷古墳 18 前田山遺跡 19 長井遺跡 20 下稗田遺跡 21 岐野遺跡 22 赤ノケ遺跡 23 柳井田早崎遺跡 24 岩山古墳群 25 楠童古墳群 26 天生田矢萩遺跡 27 矢留堂ノ前遺跡 28 福原長者原遺跡 29 竹並遺跡 30 渡榮紫遺跡 31 馬ヶ岳城跡 32 天生田大池遺跡 33 御所ヶ谷石造 34 役徳甲塚古墳 35 甲塚古墳 36 豊前国府跡 37 京ヶ辻遺跡 38 居屋敷遺跡 39 徳水川ノ上遺跡 40 カワタケ田遺跡 41 上坂魔寺 42 豊前國分寺跡 43 蓮政瓦窯跡

第3図 周辺遺跡分布図（1/70,000）

歴史的環境

上片島遺跡群の所在する京都平野では旧石器時代から現在に至るまで、多くの遺跡が展開している。

旧石器時代の遺跡としては行橋市渡榮紫遺跡C区が挙げられる。後期旧石器時代の水晶・チャート・黒曜石など剥片が多く出土しており、石器製作所の想定がなされている。このほかにも苅田町富久遺跡・新津原山古墳群・雨雀遺跡群・行橋市柳井田早崎遺跡などでナイフ形石器・槍先形尖頭器などが出土している。また、苅田町北西部には国指定天然記念物の鍾乳洞・青龍窟があり、ナウマンゾウ、オオツノジカ、ステゴドンゾウなどの化石が発見されている。

縄文時代になると、全国的に海進がおこり、片島周辺まで汀線が入り込んでいたと考えられてい

る。早期段階には遺構は不明確ながら押型文土器が刈田町山口遺跡 A 地区や行橋市福丸遺跡で出土している。後期になるとみやこ町節丸西遺跡で大規模集落が出現し、堅穴住居跡が 30 軒弱見つかっている。同じく後期には刈田町浄土院遺跡で鐘崎式並行期の土器や火葬骨を収めた西平式の葬棺が検出されている。

弥生時代の遺跡で最も古いものは行橋市長井遺跡で発見された小壺や夜臼式の壺で、これらは石棺墓群に伴ったといわれる。前期になると遺跡は飛躍的に増加し、刈田町葛川遺跡では貯蔵穴を囲む環濠が確認されており、みやこ町辻垣遺跡や行橋市矢留堂ノ前遺跡でも同様に環濠が見つかっている。また行橋市の竹並遺跡・前田山遺跡・下稗田遺跡など大規模な前期～中期の集落が出現する。中期になると先述した大規模な集落のはか、刈田町法正寺木ノ坪遺跡・同町稻光遺跡で中期後葉の円形住居跡や祭祀遺構が発見されている。後期になると、先述した前田山遺跡・下稗田遺跡、みやこ町德永川の上遺跡で墳墓群が確認されており、特に川の上遺跡では複数の船載鏡など多くの副葬品が出土している。このほか築上町安武深田遺跡では中期末～後期前半の集落が見つかっており、鍛冶炉を持つ堅穴住居など特殊な遺構が発見されている。

古墳時代は全期間を通じて大形墳が築造されており、小規模墳も稠密に分布する。前期古墳としては、墳長 110m で三角縁神獣鏡 10 数枚のほか胃、軋、素環頭大刀、鐵などが出土したとされる刈田町石塚山古墳がある。ほかにも同町天疫神社古墳群や岩屋古墳群では同時期の墳墓群が調査されており、行橋市ビワノクマ古墳では前期に属するとされる甲冑が出土している。

中期には周溝を有する墳長 120m の国指定史跡である刈田町御所山古墳があり、埴輪、銅鏡、装身具、馬具などが出土している。行橋市域では、墳長 60m ほどの帆立貝形古墳である稻童石並古墳が盟主墳と考えられ、この古墳が含まれる稻童古墳群では、これを中心として小古墳が集中する。

後期になると刈田町番塚古墳、みやこ町の箕田丸山古墳・扇八幡古墳・庄屋塚古墳、行橋市八雷古墳など中規模の前方後円墳が築造され、なかでも番塚古墳は主体部が未掘であったため、銅鏡のほか、朝鮮半島由来の鳥足文土器・蛙形金具・蓮華文大刀などの珍品が出土している。終末期には国指定史跡のみやこ町綾塚古墳（円墳）・橋塚古墳（方墳）があり、それぞれ墳長 41m・38～40m の大形墳である。旧津郡の同町豊津には 46 × 36m の長方形方墳で周溝・周堤をもつ甲塚方墳、直径 29m の円形墳丘に二重の周溝をもつ彦徳甲塚古墳があり、それぞれ小地域内の最大規模の古墳である。また、竹並遺跡や前田山遺跡に代表されるような横穴墓群が各地で見られ、そのほかにも山際に刈田町山口南古墳群など終末期の古墳群が各所に造営される。

一方、古墳時代の集落跡としては、刈田町の近衛ヶ丘遺跡・神田遺跡・法正寺木ノ坪遺跡、行橋市竹並遺跡などで弥生時代終末～古墳時代前期の遺構が発見されている。近衛ヶ丘遺跡や神田遺跡では山陰系や畿内系土器が出土しており、刈田町谷遺跡では住居跡で小型仿製鏡が出土している。刈田町神田遺跡 I 地区では 6 世紀後半の竈を有する方形住居跡が検出されており、同様に後期の集落は行橋市福富小畠遺跡、同市赤ハゲ遺跡など各地で見つかっている。また、みやこ町京ヶ辻遺跡では、居屋敷窯跡で焼いたと考えられる初期須恵器が多数出土している。

古代になると、刈田町内には西海道の「刈田」駅が設置され、その位置は『和名抄』に見える京都郡刈田郷付近に比定する説が有力となっている。

旧京都郡内には四天王寺式伽藍配置をもつ行橋市椿市廃寺が創建され、旧津郡内ではみやこ町の木山廃寺・上坂廃寺・豊前国分寺が創建される。また、国府や国分寺に瓦を供給した築上町船追

瓦窯跡が注目される。

西側の御所ヶ岳には国指定史跡である行橋市御所ヶ谷神籠石が作られ、約2,900mに及ぶ列石と土壙線を有し、7箇所の門が確認されている。中門は幅30m、高さ10m、西門は幅40m以上、高さ7mの規模であり、版築土壙に被覆される列石や前面の柱穴が確認されるなど構造の解明が進んでいる。また、役所関係としてはみやこ町国作地区的県史跡豊前国府跡をはじめとして、行橋市崎野遺跡では廐付きの掘立柱建物跡が検出されている。また、行橋市福原長者原遺跡では東九州自動車道に係る発掘調査において、1m以上の掘形を持つ掘立柱建物跡とその周間に八脚門を伴う回廊が検出されている。苅田町兩窯遺跡群では萬年通宝銭、銅椀、綠釉陶器、土馬、墨書き土器、製塩土器などが出土しており、刈田駅との関係が示唆されている。また、各地で官道も検出されており、行橋市の天生田大池遺跡・天生田矢萩遺跡・大谷車塙遺跡、みやこ町の咎見櫛ノ口遺跡・カワラケ田遺跡などが挙げられる。他に、同じ交通関係として、行橋市延永水取遺跡では草野津と椿市を結ぶ運河である可能性が示唆される大溝が検出されている。このほか、苅田町谷遺跡では唐三彩の陶枕片、行橋市高来井正丸遺跡・天生田矢萩遺跡では石帶が出土している。

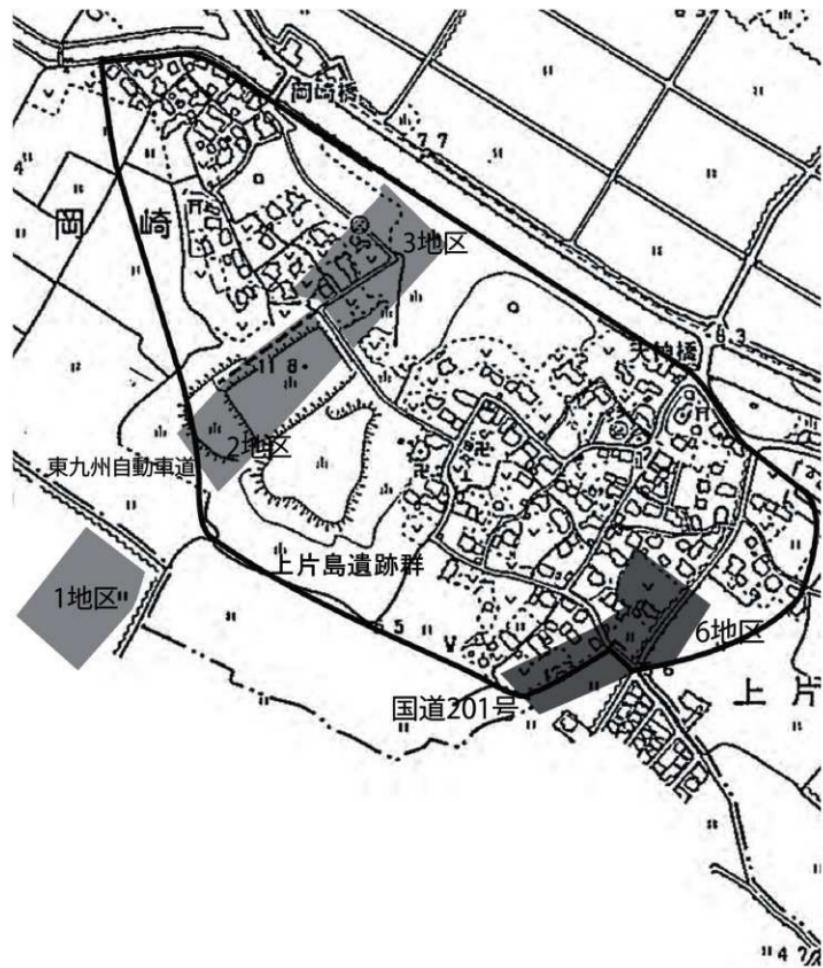
中世になると、当地は宇佐郡弥勒寺領となり、京都郡の堅島庄に比定される。苅田町南原西門田遺跡で12~14世紀の掘立柱建物跡が検出されており、社寺関連構造との想定がなされている。また、山口遺跡では12~14世紀の龍泉窯、同安窯、景德鎮窯系の陶磁器が多量に出土している。さらに苅田町松山城のほか、観山、馬ヶ岳、障子ヶ岳に山城跡が存在している。等覚寺、蔵持山などでは修驗道関係の信仰遺跡が盛行しており、等覚寺では経筒が出土している。上片島遺跡群の所在する片島の丘陵上には平井寺（現薬師寺）が現存しており、平安末頃と考えられる地蔵菩薩立像、鎌倉時代と考えられる薬師如来立像が認められている。

以上のように、地域内で連続と遺跡が見られる中で、特に古墳時代~古代においては旧農前国の中でも多くの重要な遺跡が発見されており、国府が設置される下地となっていると言える。

【参考文献】

- 石松好雄・高橋編 1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書 行橋市教育委員会
伊藤昌広・中原博編 2010『行橋市内遺跡等分布図』行橋市文化財調査報告書第37集 行橋市教育委員会
小川秀樹編 2001『崎野遺跡』行橋市文化財調査報告書第28集 行橋市教育委員会
小川秀樹はか編 1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第24集 行橋市教育委員会
小澤佳憲編 2010『福富小畑遺跡D地点』福岡県文化財調査報告書第228集 福岡県教育委員会
小野剛史・長嶽正秀編 2005『軌跡 かんだの歴史』苅田町合併50周年記念誌 苅田町
苅田町教育委員会編 2013『百合ヶ丘古墳群』苅田町文化財調査報告書第45集 苅田町教育委員会
奈庭二編 2004『福富小畑遺跡B地点』福岡県文化財調査報告書第194集 福岡県教育委員会
末永弥義編 2000『咎見櫛ノ口遺跡』豊津町文化財調査報告書第22集 豊津町教育委員会
末永弥義編 2003『豊前国府跡御所地区』豊津町文化財調査報告書第30集 豊津町教育委員会
末永弥義はか編 2010『みやこ町内遺跡等分布図』みやこ町文化財調査報告書第6集 みやこ町教育委員会
千田界 1997『歴史の背景としての自然』『豊津町史』上巻 豊津町・豊津町史編纂委員会
竹並遺跡調査会編 1979『竹並遺跡』享楽社
飛野博文・小池史哲編 2001『農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査

- 報告書第159集 福岡県教育委員会
長嶺正秀編 1987「前田山遺跡」行橋市文化財調査報告書第19集 行橋市教育委員会
長嶺正秀編 1999「岩屋古墳群」苅田町文化財調査報告書第31集 苅田町教育委員会
長嶺正秀編 2000「苅田町の文化遺産」苅田町文化財調査報告書第34集 苅田町教育委員会
長嶺正秀編 2010「苅田町歴史資料館特別展 豊前地方の遺宝 律令時代と豊前国」苅田町教育委員会
行橋市史編纂委員会編 2004「行橋市史 上巻」行橋市
行橋市史編纂委員会編 2006「行橋市史 資料編：原始・古代」行橋市
吉村靖徳編 1999「天生田大池遺跡」福岡県文化財調査報告書第137集 福岡県教育委員会
若狭善満編 2010「提遺跡群」苅田町文化財調査報告書第42集 苅田町教育委員会
若狭善満ほか編 2012「苅田町町内遺跡確認調査概報」苅田町文化財調査報告書第43集 苅田町教育委員会



第4図 上片島遺跡群周辺地形図 (1/3,000)



第5図 上片島遺跡群 6地区区割図 (1/500)

III 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

上片島遺跡群は、現在の海岸線から約5km内陸に入った、標高10m前後の低・中位段丘上に位置している。丘陵は平面が瓢箪形をなす独立丘陵で、今回の発掘調査箇所は丘陵の東端に位置している。丘陵の北側には小波瀬川が東流しており、南側には低地に田園地帯が広がっている。低地の先には同じく丘陵上に延永ヤヨミ園遺跡が展開しており、目視することができる。同一丘陵上で東九州自動車道建設に伴う発掘調査を行っており（1～3地区）、主として弥生時代終末～古墳時代、古代、中世、近世の遺構が検出されている。今回の調査地点は直線距離で300mほど東に位置しているが、独立丘陵上であることから同一集落を構成するものと考えられる。

遺物および遺構の性格は、地区により異なる。低地である6-1地区からは、溝2条、ピットが検出された。時期は弥生時代後期から古墳時代初頭が主体の包含層下で検出されており、明確に時期が判断しづらいものの弥生時代～古墳時代初頭、中世に属するものと考えられる。丘陵上の6-2・3地区では堅穴住居跡8軒、土坑4基、溝9条、土坑墓1基、ピット多数が検出された。時期は概ね弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代、中世に属し、東九州自動車道建設に伴い発掘調査を行った3地区と同様の傾向を示す。6-4地区からはドングリピットを含む土坑10基と溝5条、ピットを検出した。時期は6-1地区と同じく包含層下で検出されており、弥生時代～古墳時代初頭に属するものと考えられる。6-1・4地区で検出された包含層は丘陵に近い西側で遺物が多く含まれることから、一部のみ入力で掘削し、遺物が比較的少ない場所では重機で遺構面まで掘削した。

2 遺構と遺物

6-1地区（第6図、図版3）

6-1地区は標高4m程の低地で、溝、ピットが検出された。旧水田で、西側に水路が走っているため、調査中は常に湧水に悩まされた。試掘調査で遺構が検出されたため、そのまま重機で拡張し、遺構が概ね検出されない範囲まで広げていった。基本土層は第7図で示され、4・5層が包含層である。以下、検出された遺構について報告を行う。

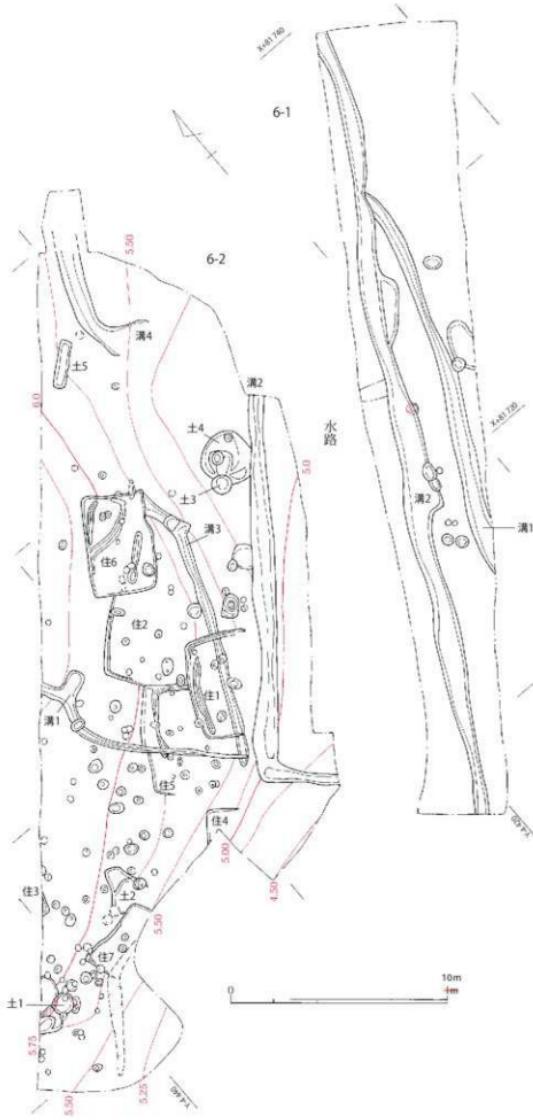
（1）溝

1号溝

調査区の東側に位置し、2号溝に切られる。規模は、長さ $18 + a$ m、幅0.95m、深さ0.4mを測る。中央部分がわずかに低く、調査時には湧水が見られた。埋土は、上面の包含層と同じ黒灰色粘質土が堆積する。

出土遺物（第8図）

1は二重口縁甌である。外面にハケ、内面にナデを施し、屈曲部との接合面で剥離する。接合面にはキサミが施される。2～4は甌である。2は底部のみが遺存し、内外面ともに磨滅する。3は小型の甌で、外面にタタキ、内面にナデを施す。口縁付近に一部黒斑が見られる。4は城ノ越式の口縁部である。ナデを施す。5は鉢である。外面にハケ後ナデ、口縁内面および底部外面にナデ、内面下部にハケを施す。



第6図 6-1・2地区遺構配置図 (1/200)

時期は、出土遺物から弥生時代中期初頭から存在し、最終埋没時期は包含層と同じ古墳時代初頭頃と考えられる。

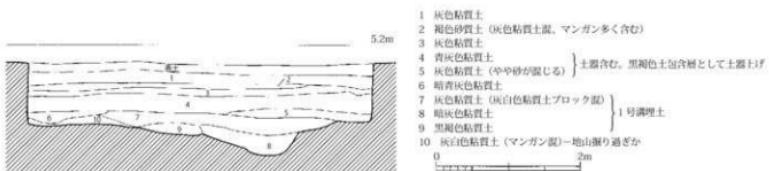
2号溝

調査区を南北に縦断し、1号溝を切る。規模は長さ $35 + a$ m、幅 0.8 ~ 1.8m、深さ 0.1m を測る。南に向かってわずかに傾斜しており、一部幅広の部分が見られる。埋土は北側では1号溝と同じ黒灰色粘質土であるが、南側では黒褐色砂質土、黄褐色砂質土が混在する。丘陵上から流れ込んできた堆積土の差異と考えられる。

出土遺物 (第8図)

6・7は二重口縁壺である。6は内外面ともに磨滅するが、外面上にわずかにハケの痕跡が見られる。7はナデを施す。8は甕である。頸部下に断面三角形の突帯を付し、口部はやや跳ね上がる。外面上ヨコナデを施し、内面は磨滅する。9・10は須恵器壺である。9は口縁のみが遺存し、10は底部および高台のみが遺存する。11・12は碗である。高台が付き、ともに磨滅が激しいが、12は内面にミガキを施す。13・14は壺か。底径は6cm前後と小さく、磨滅が激しいが共に糸切を施す。内外面共にナデを施す。

弥生時代～古代、中世の土器が入っているため判断し難



第7図 6-1地区西壁土層実測図 (1/60)

いが、上面包含層に中世期の遺物があまり含まれないことから、中世に属するものか。

(2) その他の遺構等の出土遺物 (第8図、図版13)

ピット

15は壺である。口縁下に断面三角形の突帯を付し、口唇部がやや肥厚する。内外面共にハケを施し、内面の一部には黒斑が見られる。P-I出土。

その他の遺構

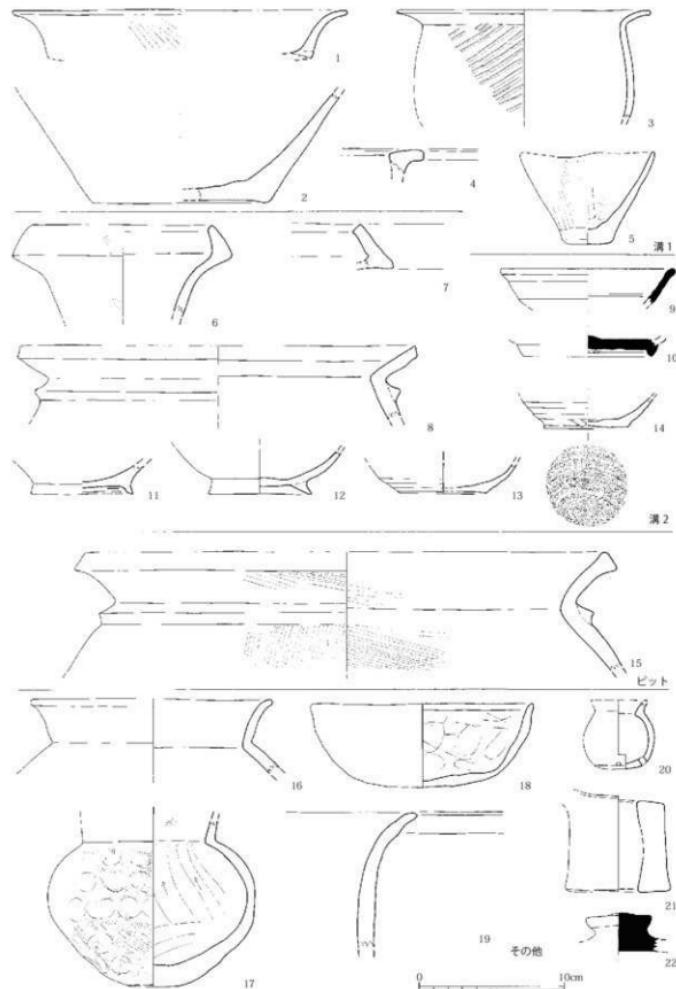
16・17は壺である。16は磨滅のため調整不明、17は口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ、胴部外面ハケ後ユビナデ、内面には工具によるナデないしはケズリを施す。共に試掘時出土。18は椀である。外面は表面の剥離が激しいもの一部ナデが残る。内面は工具痕及び指頭圧痕が見られる。口唇部及び底部付近が黒化する。試掘時出土。19は古墳時代後期の瓶である。口縁部のみが遺存し、やや歪む。内外面共にヨコナデを施す。試掘時出土。20はミニチュア土器である。体部が球状を呈し口縁端部がわずかに欠損する。内外面共にナデを施す。底部より1cmほど上方に径3mmの孔が穿たれる。包含層出土。21は支脚である。筒状を呈し、一方向に突出部をもつ。外面は磨滅のため調整不明、内面はナデを施す。試掘時出土。22は須恵器の蓋である。つまみ部分のみが遺存する。壁面清掃時出土。

(3) 小結

6-1地区は弥生時代ならびに中世に一部溝やピットを掘削しているものの、全体としては土地利用の痕跡は乏しい。上面包含層に弥生時代、古墳時代、古代、中世まで土器が散見されることから、多くの土器が時期を問わざり流れ込んでいたものと考えられる。

6-2地区 (第6図、図版3)

6-2地区は標高6~4.5mで丘陵縁辺部に当たる。東南および北東方向に向かって傾斜しており、今回調査した中では最も遺構の検出量が多く、住居跡、土坑(5号は墳墓)、溝、ピットが検出された。10mほど北側の用地内でトレンチを掘削したところ、現地表から3mの深さで6-1地区と同様の青灰色粘質土が検出されたことから、元の地形が大きく変化していることがわかる。なお、4号溝の北側については遺構面が続くと考えられるものの電柱が立っていることや、用地内が狭くなること、地表面からの深さが大きくなり安全勾配が確保できないことから調査は行っていない。基本土層は第9図で示され、上面のにぶい褐色・褐灰色粘質土は盛り土、褐色粘質土は包含層と考えられる。以下、検出された遺構について報告を行う。



第8図 6-1地区出土土器実測図 (1/3)

(1) 堅穴住居跡

1号住居跡（第10図、図版4）

調査区の中央東寄りに位置し、2号住居跡・3号溝を切り、2号溝に切られる。斜面によって1/4程度がカットされる。規模は長軸4.8m、短軸3.1m、深さ0.3mを測る。西側壁面にのみ壁溝が見られ、ややずれた位置に柱穴が2本確認された。位置からは4本柱と考えられるが、その深さから考えれば削平されたとは考えられず2本柱となるか。

出土遺物（第11図）

1は鉢である。口縁部がわずかに外湾し、表面に丹の痕跡がある。口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ一部指頭圧痕、内面ケズリを施す。2は高坏の脚部である。中央部に1ヶ所のみ径0.9cm、深さ0.8cmの刺突痕が見られる。孔を穿とうとしたものか。外面磨滅し、内面は下部ナデ、上部シボリを施す。

時期は、出土遺物と切り合いから7世紀代に属するものと考えられる。

2号住居跡（第10図、図版5）

調査区中央に位置し1・5号住居跡に切られる。6号住居跡にも切られるとしているが、出土土器からすれば、切り合いを誤認した可能性が高い。斜面によって東側がカットされる。規模は南北4.3m、東西2.3+m、深さ0.3mを測る。北側の隅にカマドが敷設される。西側の隅を中心として一部壁溝が見られる。ピットは散見されるものの、明確に並んでおらず、また浅いことからカットされた可能性もあり、主柱穴は不明である。

カマド（第10図、図版4）

2号住居跡の北側隅で検出された。6号住居跡に切られるが、右袖53cm、左袖33cmが残存する。両袖間ならびに右袖の外側で被熱痕跡が見られ、中央部に高坏が倒立して設置され、高坏の上部には甕の破片が散見される。カマド構築土は灰白色粘土である。

出土遺物（第11図、図版13）

3は壺である。口縁部外反し、下部に竹管文を施す。口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面および胴部外面ミガキを施し、他は磨滅する。混入品か。4は甕である。カマド東方の床面で出土した。口縁部は外湾し端部がやや突出する。胴部内面はナデ及び指頭圧痕、他はハケを施す。5は高坏である。坏部の器高が高く、脚部は短い。脚部端ヨコナデ、脚部内面ナデ、坏部内面工具によるナデ、他はハケを施す。口縁部付近が一部黒変し、支脚として使用されたことがわかる。6はミニチュア土器である。口縁部がわずかに外反し、底部はわずかに平底を呈する。カマド上部から出土し被熱痕跡が見られないことから最終段階に投棄されたものと考えられる。外面に黒斑が見られる。

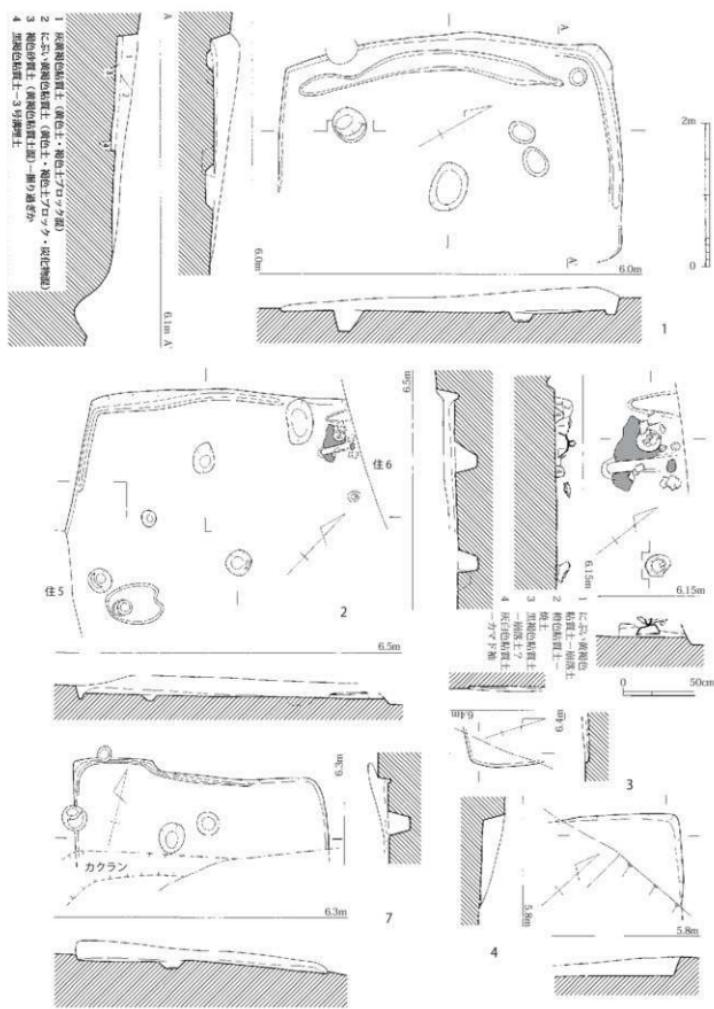
時期は、出土遺物と切り合いから古墳時代後期に属するものと考えられる。

3号住居跡（第10図）

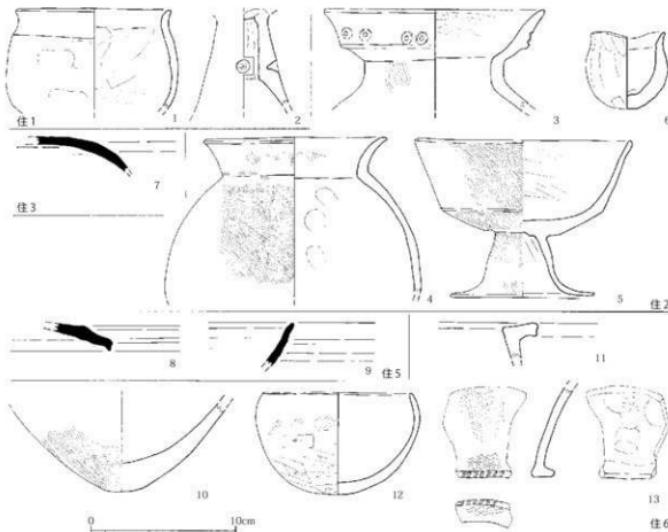
調査区の西側端で、角のみ検出された。0.5×0.9mのみ遺存し、深さ0.05mを測る。明確に角を持つことから住居跡と推定したが、土坑などである可能性もある。

表土
にぶい褐色粘質土
褐色粘質土
褐色粘質土
灰白色粘質土(地山)

第9図 6-2 地区基本
土層



第10図 6-2地区1~4、7号住居跡実測図 (1/60, 1/30)



第 11 図 6-2 地区 1 ~ 3、5、6 号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (第 11 図)

7 は須恵器の壊である。天井部のみが遺存する。外面回転ヘラケズリ、天井部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。焼成不良で、灰白色を呈する。

時期は、出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

4 号住居跡 (第 10 図)

調査区の南側に位置し、丘陵落ちにカットされるため 1 角のみ検出された。22 × 2.2m のみ遺存し、深さ 0.3m を測る。

土師器小片が出土しているが図化に耐えうる資料はないため時期は不明である。

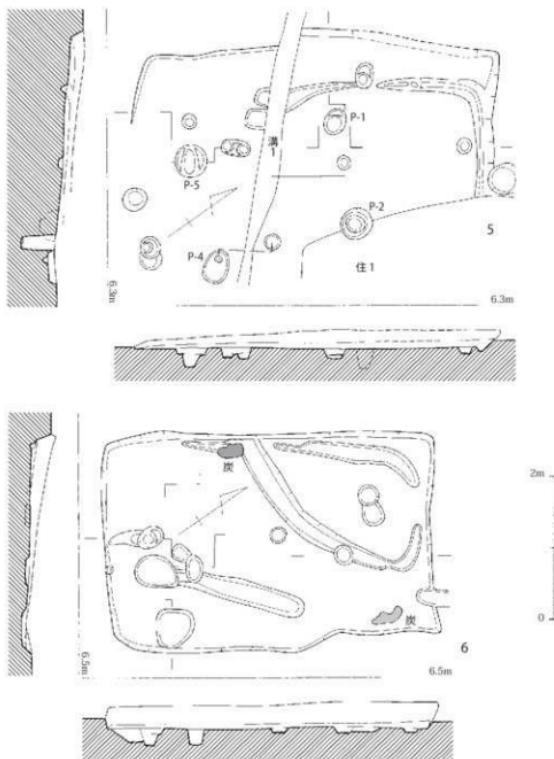
7 号住居跡 (第 10 図)

調査区の南側に位置し、調査区外に続く。2 号土坑を切る。規模は東西 3.5m、南北 1.3m、深さ 0.2m を測る。北側に細い壁溝が見られる。調査区外に伸びるため主柱穴は不明である。

土師器、須恵器の小片が出土しているが図化に耐えうる資料はない。時期は、出土小片から古墳時代後期に属するものか。

5 号住居跡 (第 12 図、図版 4)

調査区中央やや南側に位置し、1 号住居跡、1 号溝に切られ、2 号住居跡を切る。東側を斜面によっ



第12図 6-2地区5・6号住居跡実測図(1/60)

てカットされ、残存規模は南北5m、東西 $3.5 + a$ m、深さ0.3mを測る。西側壁面から0.8mほどの位置で壁溝が見られる。主柱穴はやや平面プランとずれるが、P-1・2・4・5の4本柱になるか。
出土遺物（第11図）

8は須恵器の蓋である。器高が低く、潰れたつまみがつくタイプのものと考えられる。内外面共に回転ナデを施す。9は壊身である。口縁のみが遺存しており、内外面共に回転ナデを施す。共にP-2出土。このほか後述する鉄鎌が出土している。

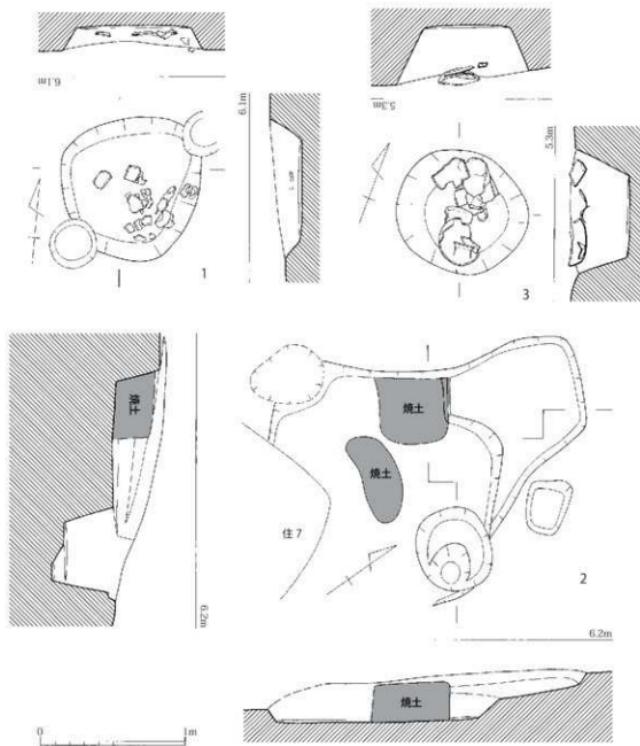
時期は、出土遺物と切り合いから7世紀代に属するものと考えられる。

6号住居跡（第12図、図版5）

調査区中央やや北側に位置し、3号溝を切る。先に述べたように2号住居跡を切るとしているが、出土土器から考えると本住居跡のほうが古い。規模は長軸4.5m、短軸3m、深さ0.3mを測る。北東隅及び西辺中央部付近に炭化物が見られる。ピットは散見され、明確ではないものの2本柱になるものと考えられる。

出土遺物（第11図、図版13）

10は壺の底部である。わずかに平底気味になる。外面ハケ、内面ケズリ、内面底部付近ナデを施す。11は城ノ越式の甕口縁部である。内外面共に磨滅する。流れ込みか。12は椀である。口縁は内湾し、端部を丸く仕上げる。口縁部ヨコナデ、口縁下外面ハケ後ナデ、外面下半ケズリを施し、内面口縁



第13図 6-2地区1～3号土坑実測図（1/30）

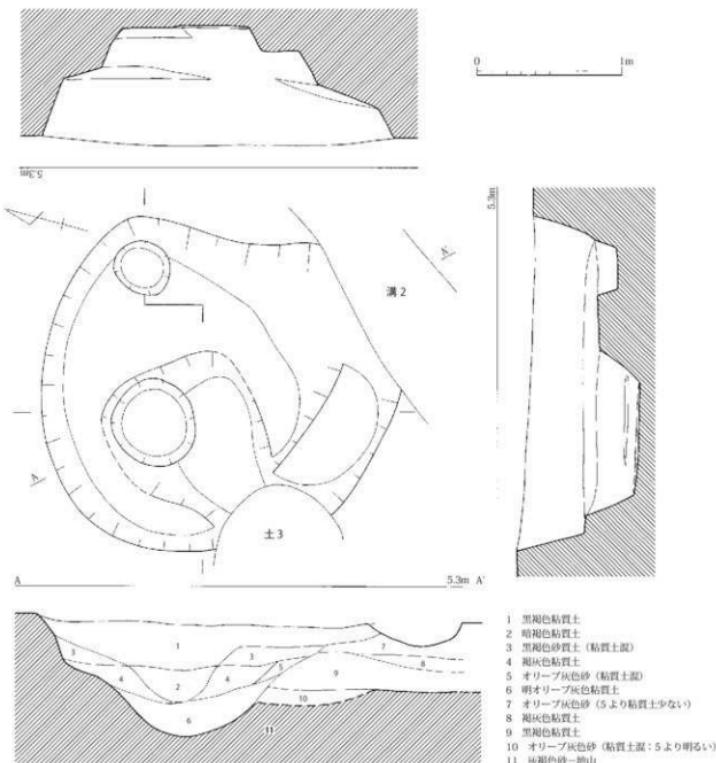
より下部は磨滅する。2号住居跡に近い位置で出土しており、切り合ひ認認であれば2号住居跡に伴うものか。外面に黒斑が見られる。13は手焙り形土器である。覆部の面の一部が残存している。外面ハケ、内面ハケ後ナデを施す。面の上端にはキザミ、面及びその上面に波状文を施す。右側が若干広くなることから、右側の耳に近い部分と考えられる。

時期は、出土遺物から古墳時代初頭に属するものと考えられる。

(2) 土坑

1号土坑（第13図）

調査区の西側に位置する。規模は径1m、深さ0.2mで円形を呈する。土器が小片になって広がる。



第14図 6-2地区4号土坑実測図 (1/30)

出土遺物（第15図、図版13）

1は土師器の壺である。口縁は直線的に外反する。口縁部ヨコナデ、内面ナデを施し、外面は磨滅する。2は土師器の皿である。外面はケズリ後ナデ、内面は磨滅するがミガキを施す。3は須恵器蓋である。口縁部のみが遺存し、回転ナデを施す。4・5は須恵器の壺である。高台が踏ん張るタイプのもので、共に外面回転ナデ、内面不定方向のナデを施す。

時期は、出土遺物から8世紀前半頃に属するものと考えられる。

2号土坑（第13図）

調査区の南側に位置し、7号住居跡に切られる。規模は長軸2.2m、短軸1.85m、深さ0.3mで不定形を呈する。西側に焼土が見られたため、カマドを敷設する住居跡の可能性も考えたが、北側で床面から0.15mほど高い段が検出されたため土坑とした。

土師器、須恵器の小片が出土しているが図化に耐えうる資料はない。時期は出土小片から古墳時代後期に属するものか。

3号土坑（第13図、図版5）

調査区の北側に位置し、4号土坑を切る。規模は径0.9m、深さ0.4mで円形を呈する。床面から0.3mの位置で土器がまとまって出土した。

出土土器（第15図）

6～8は甕である。概ね内外面共にハケを施す。7の内面には指頭圧痕、6の外面および8の内面下部はハケ後ナデを施す。8はわずかに平底を呈する。3点共に黒斑が一部見られる。

時期は、出土遺物と切り合いから、弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

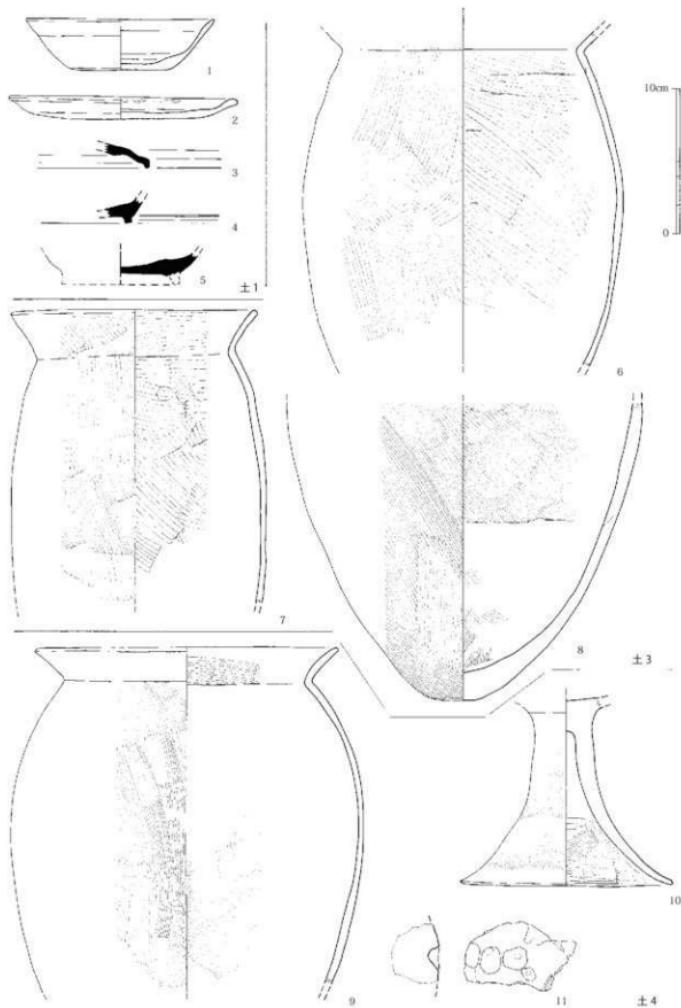
4号土坑（第14図、図版6）

調査区の北側に位置し、3号土坑、2号溝に切られる。規模は径2.5m、深さ0.8mで円形を呈する。中央やや西よりに段を持ち、径1m程の部分が0.3mほど深くなる。東側土層で4号土坑が切るような層（7～10層）が認められたが、周囲の検出では遺構は検出されず、下層にこのような堆積物が認められたのは、ここのみである。考えられる可能性としては、水流等で土が流出し、その後4号土坑の検出された形で再掘削されたものか。調査中は湧水が見られ、水場であった可能性もある。

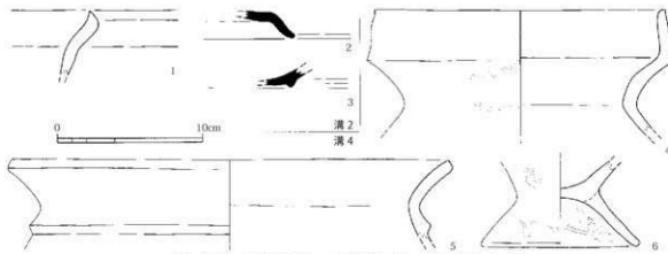
出土遺物（第15図、図版13）

9は甕である。口縁は直線的に外反する。口縁部外面ヨコナデ、内面及び胴部外面ハケ目胴部内面上半ナデ、下半ハケを施す。外面の一部に黒斑が見られる。10は高环脚部である。内面上半ナデ、他はハケを施す。11は支脚である。後面の部分と考えられ指で押えて作ったと考えられる凹みが二つ見られる。

時期は、出土遺物と切り合いから弥生時代終末に属するものと考えられる。



第15図 6-2地区1、3、4号土坑出土土器実測図(1/3)



第16図 6.2地区2、4号溝出土土器実測図 (1/3)

(3) 溝

1号溝

調査区中央に位置し、5号住居跡、3号溝を切る。東西方向に横断し東流する。規模は長さ約11m、幅0.2~0.5m、深さ0.4mを測る。西側の調査区端で二股に分かれ、焼土及び炭化物が多量に出土した。

土師器・須恵器の小片が出土しているが図化に耐えうる資料はない。切り合いと土器片から古代以降に属するものと考えられる。

2号溝

調査区東側に位置し、1号住居跡、4号土坑を切る。丘陵の外側をめぐり、中央部で直角に折れる。規模は長さ $20.5 + a$ m、幅1.2m、深さ0.6mを測る。

出土遺物（第16図）

1は瓦質土器の鉢である。磨滅のため調整は不明である。2は須恵器の蓋である。端部を丸く仕上げ、回転ナデを施す。3は壺である。断面三角形の高台が付き、外面回転ナデ、内面不定方向のナデを施す。

時期は、出土遺物と切り合いから中世に属するものと考えられる。

3号溝

調査区中央に位置し、1・6号住居跡、1号溝に切られる。南流するが、北端を除きほとんど床面に差異はない。規模は長さ13m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。弧状に伸び、北寄りで一部幅が広がる。

土師器の小片が出土しているが図化に耐えうる資料はない。切り合いと土器片から古墳時代初頭以前に属するものと考えられる。

4号溝

調査区北端に位置し、南流する。規模は長さ $8 + a$ m、幅1m、深さ0.3mを測る。丘陵斜面に沿い、南端で開放される。

出土遺物（第16図）

4は二重口縁壺である。口縁が直線的にやや内傾する。頸部外面ハケ、他はナデを施す。5は壺である。口縁下に断面三角形の突帯を付し、口唇部はやや跳ね上がる。内外面共にナデを施す。6は脚付鉢である。胴部内面ナデ、他はハケを施す。

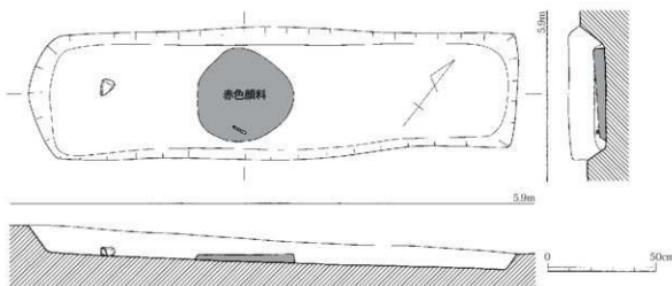
時期は、出土遺物から弥生時代終末に属するものと考えられる。

(4) 墓

5号土坑（第17図、図版6）

調査区北側に位置する。規模は長さ2.25m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。削平が著しいため木棺等の痕跡は確認できなかった。中央部径0.4mほどの範囲で赤色顔料が確認され、分析の結果ベンガラであった。南西側には小石が見られ、こちらが頭部となるか。

出土遺物は後述するヤリガンナが出土しており、時期は弥生時代末～古墳時代に属するか。



第17図 6-2 地区5号土坑実測図（1/20）

(5) その他の造構等の出土遺物（第18図、図版13）

ピット

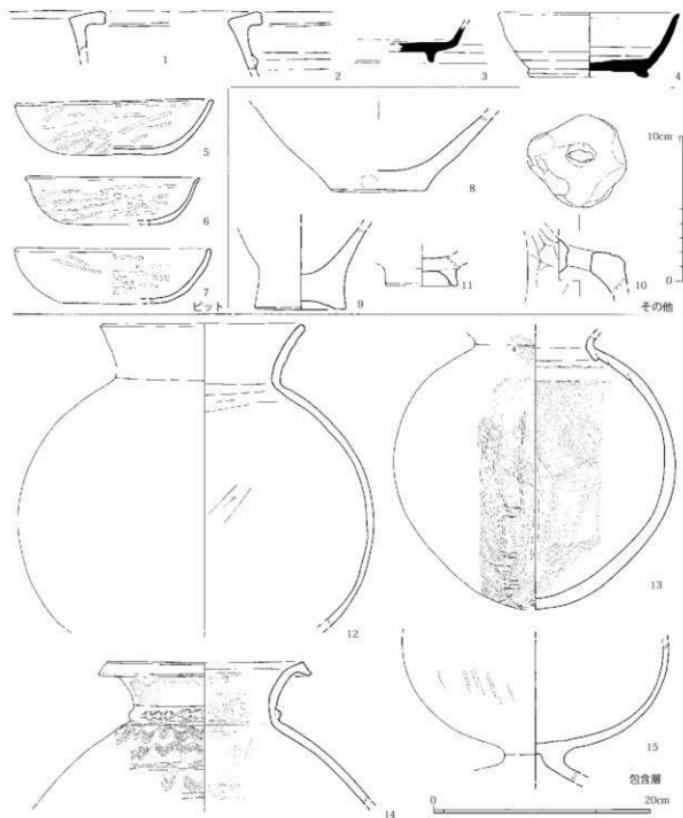
1・2は壺である。口縁のみが遺存し、城ノ越式～須玖I式古段階頃のものと考えられる。ヨコナデを施す。P-60出土。3・4は須恵器の坏である。底部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。3はP-33、4はP-55出土。5～7は土師器の坏である。5・7は端部を丸く仕上げ、6はわずかに外湾する。内外面共にミガキを施す。5はP-12、6はP-27、7はP-17出土。

造構外

8は壺である。平底を呈し、内面ナデ、外面ハケを施す。表土剥ぎ時出土。9は壺である。底部がレンズ状に凹み、弥生時代中期初頭頃に属するものか。底部ナデ、他は磨滅のため不明である。試掘時出土。10は支脚である。中央に1.7cm程の孔を穿ち、突出部を1箇所もつ。試掘時出土。11は磁器の椀である。高台の先端のみ露胎としてのこる。試掘時出土。

包含層

12～14は壺である。12は口縁部を丸く仕上げる。口縁部ヨコナデ、内面ケズリもしくはその後ナデを施す。外面は工具によるナデを施すか。外面の一部に黒斑が見られる。13は丸底で内面ハケ、外面ハケ一部縱方向のミガキを施す。外面の一部に黒斑が見られる。14は口縁端部が外側に突出し、三角形を呈する。頭部にキザミの入った突帯を付し、その下位に横方向のハケ、波状文を交互に施す。口縁部ヨコナデ、頭部外面ハケ、内面ミガキを施す。15は脚付の鉢である。低い脚がつくもので、

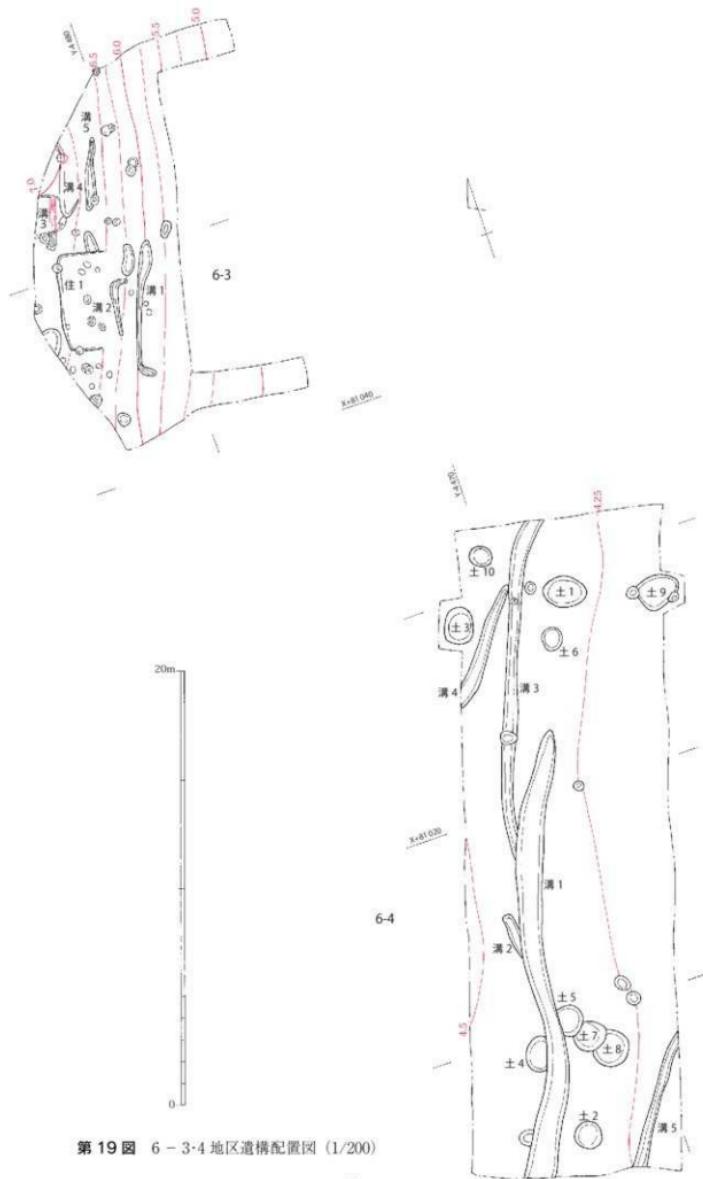


第18図 6地区その他の遺構、包含層出土土器実測図 (1/3, 12~15は1/4)

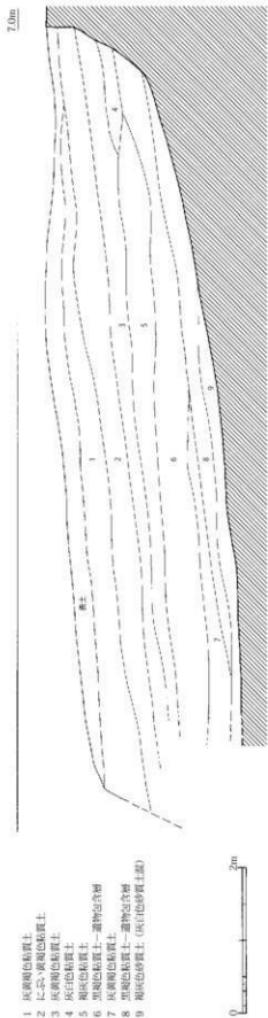
内外面共にナデを施し、外面の一部に工具痕が見られる。外面の一部に煤が付着する。全て黒褐色土包含層出土。

(6) 小結

6-2地区は弥生時代後期までは土地利用の痕跡は少ないものの、終末期になると住居や土坑などが作られ、その後古墳時代後期にも住居が作られる。このような傾向は先に述べたように、東九州自動車道で調査を行った、上片島遺跡群3地区と同様のものであり、当該時期には丘陵全体に集落が展開していたものと考えられる。その後、7世紀や中世においても土坑や溝などが作られ、近代以降に盛土により現在の地形になったものと考えられる。また、住居跡が斜面下方で削平されて



第19図 6-3-4地区造構配置図 (1/200)



第20図 6-3地区構造土層実測図 (1/60)

いることから、盛土だけではなく、削平も行われたものと考えられる。

6-3地区(第19図、図版7)

6-3地区は標高7~5mで丘陵縁辺部に当たる。東方向に向かって傾斜しており、他の地区よりも傾斜角度が大きい。調査は遺構が残る地点まで表土剥ぎを行い、それ以下は重機によって南北にトレーニングを掘削し傾斜を確認した。住居跡、溝、ピットが検出された。調査区南壁の土層は第20図で示され、6・8層の黒褐色粘土質土が遺物包含層である。なお、南側の住宅と6-4地区の間に位置する丘陵上部については、トレーニングを掘削したが、厚い客土が盛られており、6-3地区的傾斜角度も考え合わせると地山まで2m以上の掘削が必要と考えられる。調査区の幅は狭いところでわずかに1m強ほどしかなく、安全勾配が取れないことから調査は行っていない。以下、検出された遺構について報告を行う。

(1) 積穴住居跡

1号住居跡(第21図、図版8)

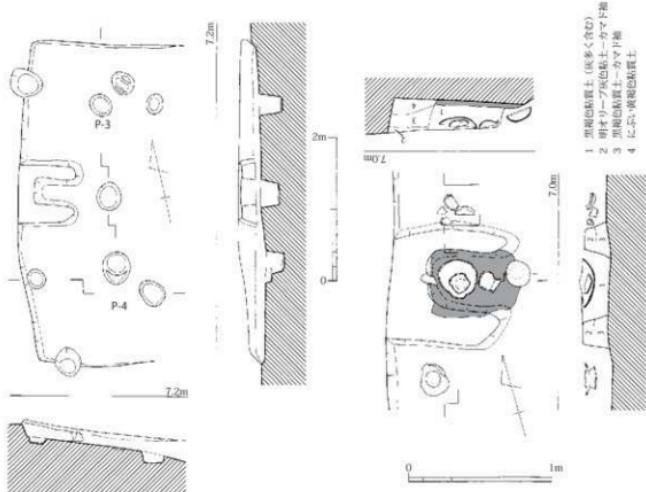
調査区の中央西側に位置し、東側半分ほどを斜面によってカットされる。残存規模は南北4.5m、東西2.1+a m、深さ0.3mを測る。西側の中央部にカマドが敷設される。主柱穴はP3・4で東側がカットされているものの4本柱になるものと考えられる。

カマド(第21図)

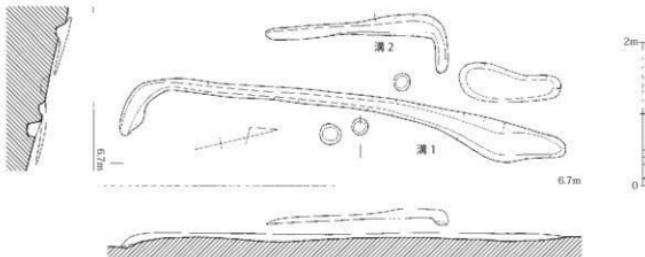
2号住居跡の西側中央で検出された。右袖90cm、左袖85cmで、両袖間は38cmである。両袖間ならびに袖の前側で被熱痕跡が見られ、焼土が床面より4mm堆積していた。袖間の中央部から鉢および壺の破片、付近から須恵器壺蓋が出土した。カマド構築土は明オリーブ灰灰色粘土である。

出土土器(第23図、図版13・14)

1は小型の鉢である。口縁が緩やかに外湾し、端部を丸く仕上げる。全体的に磨滅するが、内面にわずかにケズリの痕跡が見られる。カマド上部出土。2・3は壺である。2は口縁部の屈曲が強く、3は緩やかに外湾する。共に端部を丸く仕上げる。2は口縁部外面ヨコナダ、頭部内部指頭圧痕、胴部内面ナダを施し、胴部外面にはや



第21図 6-3地区1号住居跡実測図(1/60, 1/30)



第22図 6-3地区1・2号溝実測図(1/60)

や不明瞭ながらタタキが見られる。3は口縁部ヨコナデ、胴部外面粗いハケ、内面ケズリを施す。2はカマド南側出土。4は坏である。口縁部が緩やかなS字状を呈し、端部を丸く仕上げる。ミガキを施しているものと考えられるが磨滅のため不明である。カマド上部出土。5・6は須恵器の坏蓋である。胴部中位に段を有し、口縁部は細まる。天井部～胴部上半外面回転ヘラケズリ、天井部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。カマド北側出土。7・8は須恵器の坏身である。口縁部は内傾し、口唇部に段を有す。底部～胴部下半外面回転ヘラケズリ、底部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。カマド北側出土。

時期は、出土遺物から古墳時代後期前半に属するものと考えられる。

(2) 溝

1号溝（第22図）

調査区の西南側に位置する。規模は長さ6.1m、幅0.55m、深さ0.1mを測る。南端部で東側に屈曲し、0.7mほど伸びたところで斜面に削平される。下方にピットが検出できぬため不明確なものの住居跡の壁溝である可能性がある。

土師器の小片が出土しているが図化に耐えうる資料はなく、時期は不明である。

2号溝（第22図）

調査区の中央西南よりに位置する。規模は長さ2.5m、幅0.3m、深さ0.2mを測る。北端で東側に屈曲し、0.6mほど伸びたところで斜面に削平される。1号溝と同様、下方にピットが検出できぬため不明確なものの住居跡の壁溝である可能性がある。

土師器の小片が出土しているが図化に耐えうる資料はなく、時期は不明である。

3号溝

調査区北西側に位置する。規模は長さ2.5m、幅0.25m、深さ0.15mを測る。

図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器の小片が出土しているのみであり、時期は不明である。

4号溝

調査区北西側に位置する。規模は長さ3.5m、幅0.85m、深さ0.15mを測る。東側の斜面下部分はカットされており段状に残る。

出土遺物（第23図）

9は甕である。口唇部がわずかに突出する。ヨコナデを施す。10は須恵器の脚部である。高坏になるか。回転ナデを施す。

時期は、出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

5号溝

調査区北側に位置する。規模は長さ3.4m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。

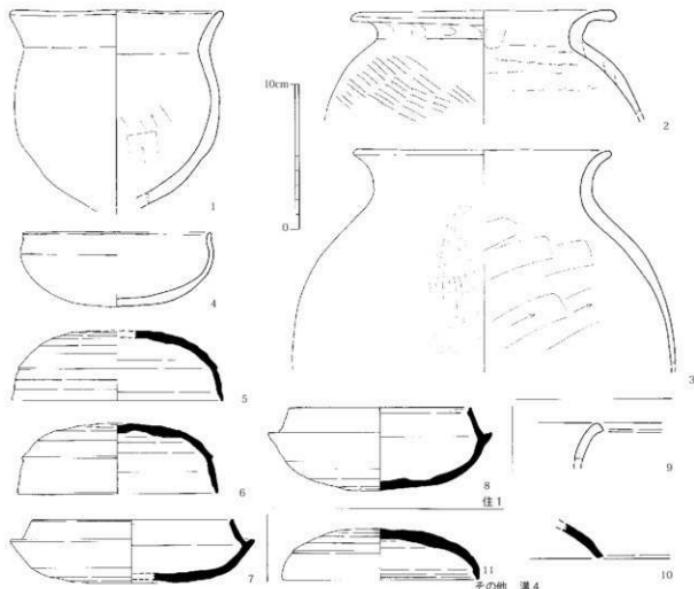
古墳時代後期と考えられる土師器の小片が出土しているが図化に耐えない。

(3) その他の遺構等の出土遺物（第23図）

11は須恵器の壺蓋である。口縁部内面にわずかに段が形成される。天井部～胴部上半外面回転ヘラケズリ、天井部内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。清掃時出土。

(4) 小結

6-3地区は狭小で土地利用の痕跡は少ないものの、少なくとも古墳時代後期には住居が作られる。調査区西方の畠地では土師器片などが散見されることから、6-2地区と同様に西方に集落が展開していたものと考えられる。また、住居跡が斜面下方で削平され、一部包含層を切りこんでいることから、古墳時代後期には、既に一定程度土砂の堆積があり、地山面よりも緩やかな傾斜を持つ



第23図 6-3地区出土土器実測図(1/3)

て谷部に接続していたものと考えられる。

6-4地区(第19図、図版9)

6-4地区は標高4m強の低地で、ドングリピットを含む土坑、溝、ピットが検出された。6-1地区と同様旧水田であり、調査中は常に湧水に悩まされた。調査は遺構の検出された範囲から広げていき、一部は手掘りで調査区を拡張した。調査区西端から5mほどまでは上層包含層に含まれる土器が多く出土したもの、それ以東は急激に出土量が減少した。調査区北側には住宅基礎が埋まっており、基礎間に入れたトレンチで遺構が確認されなかったこと、6-3地区的成果から、西側に丘陵下端が入り込むと考えられたことから拡張していない。埋土はほとんどがシルト化した黒灰色粘質土である。以下、検出された遺構について報告を行う。

(1) 土坑

1号土坑(第24図、図版9)

調査区の北側に位置する。規模は径1.5×1.7m、深さ0.55mを測る不正円土坑である。上端から0.35mの位置で明確に加工痕が見られない板などが出土し、さらにその下位にはドングリが20cmほど堆積していた。中には枝についたままのドングリも認められた。床面は径1.4mほどの円形を

呈し、一部はオーバーハングする。

出土遺物（第25図、図版14）

1～3は壺である。1は二重口縁壺で口縁端部が強く外湾する。口縁部に竹管文が施され、2箇所残る。口縁部外面にヨコナデを施す。最下層出土。2は口唇部にX字状のキザミを施し、やや肥厚する。頸部には断面台形で幅広のキザミを施した突帯が付される。口縁部外面ハケ目、内面ナデを施す。突帯下部に一部弧状の沈線が認められ、波状文が施されていた可能性がある。3は口唇部が強く外湾する。頸部外面ハケ後ナデ、口縁部ヨコナデ、内面ハケを施す。4は壺ないしは鉢の底部か。ごくわずかに平底を呈する。外面ナデ、内面ハケを施す。5は壺である。平底気味を呈し、口縁端部は四角く仕上げる。口唇部ヨコナデ、口縁～胴部外面縦方向のハケ、口縁部内面ハケ、胴部内面はハケ後ナデを施す。完形品で最下層から出土した。6・7は壺である。6は底部で平底を呈する。外面は磨滅が激しいがハケが見られ、内面はナデを施す。古い時期の混入品か。7は口縁が直線的に外反し、端部は四角く仕上げる。口縁部は磨滅するが、胴部外面は細ハケ後粗いハケを施し、一部ナデを施す。内面は斜め方向の細ハケ、粗いハケを施し、一部はその後ナデを施す。8・9は高坏で、接合しないものの同一個体の可能性がある。8は坏部で、口縁が外湾しながら開く。端部はわずかに下位に突出し、丸く仕上げる。内外面共にハケ後ミガキを施し、暗文状に仕上げる。9は脚部で裾が緩やかに開き、端部は四角く仕上げる。中位に孔を穿ち、位置から3箇所に施したものと考えられる。外面縦方向のミガキ、内面上半ハケ、内面上半ボリを施す。10は脚付鉢である。鉢部は坏形を呈し口縁部がわずかに内湾する。口縁部ヨコナデ、外面ハケ、内面ケズリを施す。外面の一部に黒斑が見られる。11は鉢である。口縁は薄く短く、直線的に伸びる。口縁部内面ハケ、胴部内面上位ナデ、中位横方向のハケ、下位横方向工具によるナデが施される。外面は磨滅するがハケ目がわずかに残る。12は支脚である。内面上下端ハケ、中位ナデを施す。外面は磨滅するが、一部指頭压痕、ハケの痕跡が見られる。

時期は、出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

2号土坑（第24図、図版9・10）

調査区の南側に位置する。規模は径1.3m、深さ0.6mを測る円形土坑である。断面台形で、床面は径0.9mの円形を呈する。床面から15cmほどの間でドングリが出土した。

出土遺物（第26図）

1は二重口縁壺である。口縁がほぼ直立し、頸部に断面三角形でキザミを施した突帯を付す。口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ、胴部外面ハケ後ナデ、頸部内面ハケ後ナデ、胴部内面ケズリ後ナデを施す。このほか、後述する石庖丁・すり石が出土している。

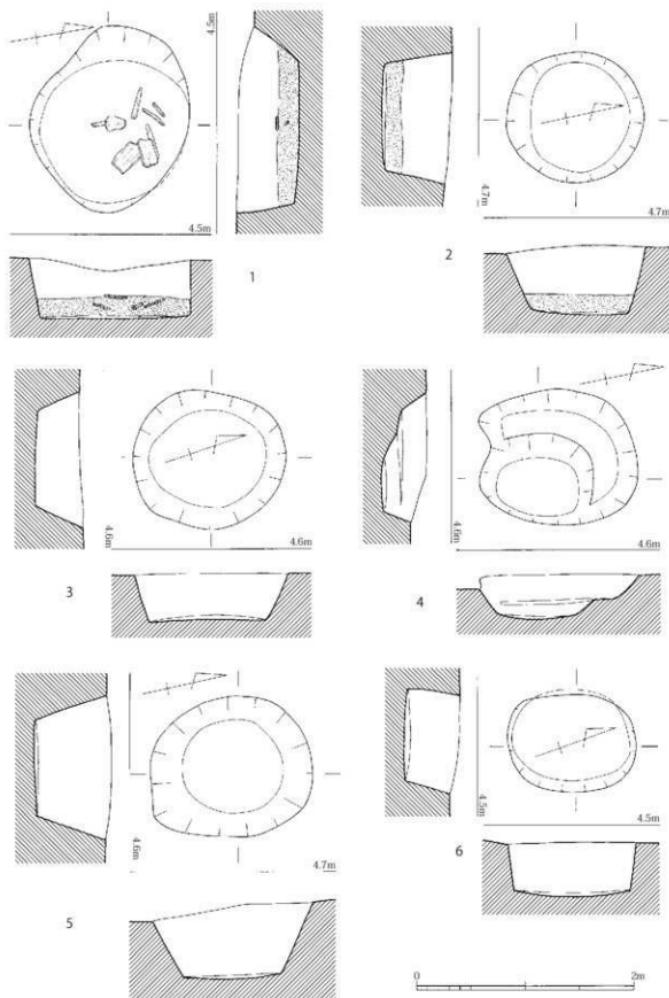
時期は、出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

3号土坑（第24図、図版10）

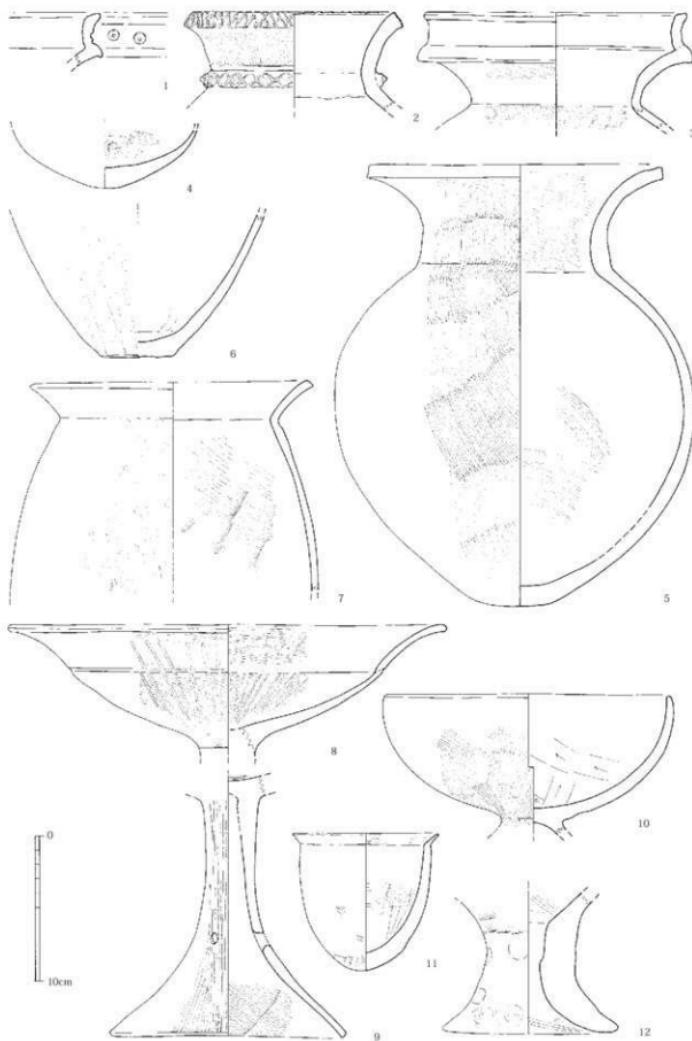
調査区の北西側に位置する。規模は径1.3×1.4m、深さ0.45mを測る円形土坑である。断面台形で、床面は径1mの円形を呈する。

出土遺物（第26図）

2は二重口縁壺である。口縁はやや内傾し、端部は四角く仕上げる。口縁部ヨコナデ、外面ハケ



第24図 6-4地区1~6号土坑実測図(1/40)



第25図 64地区1号土坑出土土器実測図 (1/3)

後ナデ、内面ハケを施す。上層出土。3は甕である。平底を呈し、やや凹む。外面ハケを施す。4は高坏である。口縁が内湾し、内部にやや突出する。外面ミガキ、内面ハケ後ミガキを施し暗文状に仕上げる。外面の一部が赤褐色を呈しており、化粧土と考えられる。5は器台である。口縁部が外反し、外面ナデ、内面ハケを施す。6は器台か、緩やかに開き、内面ナデ、外面は磨滅するが一部ハケが残る。上層出土。7・8は上方の一部が開く器台である。7は磨滅のため不明瞭だが、外面にハケ、内面に工具の当たり痕跡がある。共に上層出土。8は外面ハケ、内面上半ハケ、下半ナデを施す。9は支脚である。中央に孔を穿ち、一方向に突出する。外面全体に指頭圧痕が残る。上層出土。

時期は、出土遺物から弥生時代後期後半～終末に属するものと考えられる。

4号土坑（第24図）

調査区の南側に位置し、1号溝を切る。規模は径 $1.3 \times 1.5m$ 、深さ0.4mを測る不定形土坑である。北西側に段が作られ、床面は径 $0.5 \times 0.8m$ の長楕円形を呈する。

出土遺物（第26図）

10は甕である。平底を呈し、内外面共にハケ、底部内面に指頭圧痕を施す。11は甕か。口縁のみが遺存し、内外面共にハケを施す。

時期は、出土遺物と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

5号土坑（第24図、図版10）

調査区南側に位置し、7号土坑、1号溝を切る。規模は $1.3 \times 1.5m$ 、深さ0.7mを測る不正円土坑である。断面台形で、床面は径0.9mの円形を呈する。

出土遺物（第26図）

12は甕である。平底を呈する。内外面共に磨滅のため調整は不明である。

時期は、出土遺物と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

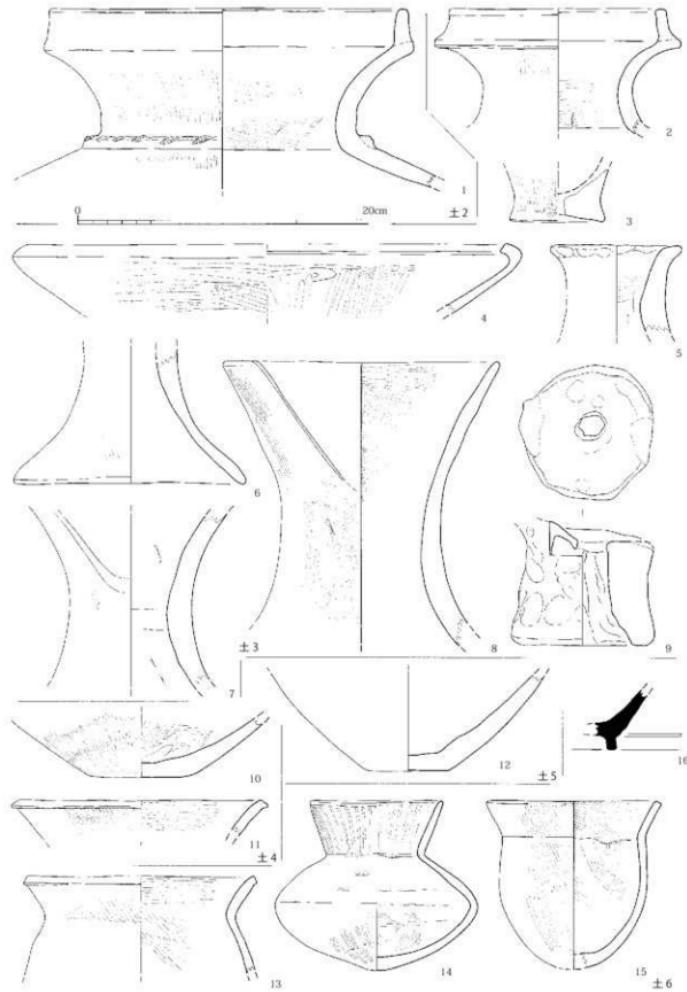
6号土坑（第24図、図版11）

調査区の北側に位置する。規模は径 $0.9 \times 1.2m$ 、深さ0.5mを測る長楕円形土坑である。床面は $0.8 \times 1.1m$ の長楕円形を呈し、一部がオーバーハングする。

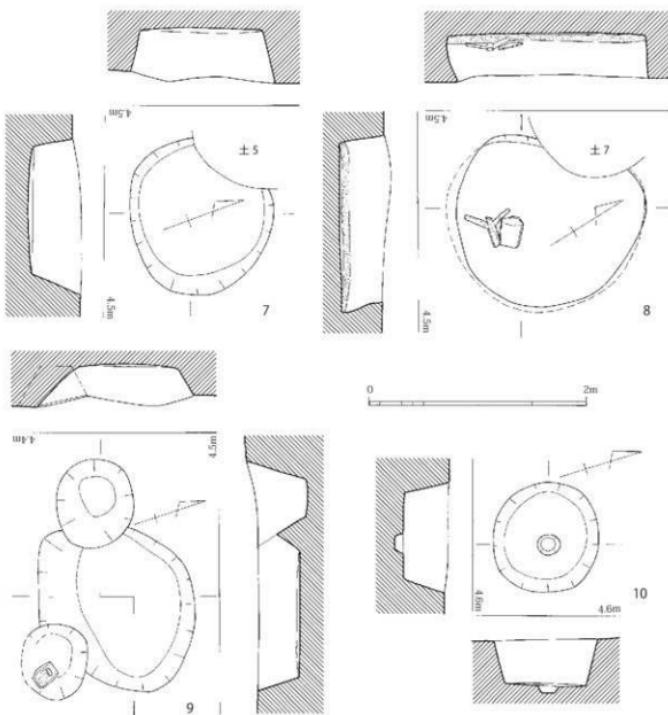
出土遺物（第26図）

13は小型の甕である。口縁部は直線的に外反し、口唇部がやや下方に突出する。内外面共にハケを施す。14は甕である。口縁は直線的に外反し、胴部は中位で尖り気味に膨らむ。口縁部ミガキ、胴部外面上半ハケ後ナデ、下半ミガキ、胴部内面上半ナデ、下半ハケを施す。15は鉢である。口縁は直線的に外反し、端部は四角く仕上げる。内外面共にハケを施す。口縁部外面付近に煤が付着する。16は須恵器の坏もしくは甕である。高台を有し、回転ナデを施す。混入品か。このほか、後述する土錐が出土している。

時期は、出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。



第26図 6-4地区2~6号土坑出土土器実測図 (1/3)



第27図 6-4地区7~10号土坑実測図(1/40)

7号土坑(第27図)

調査区の南側に位置し、8号土坑を切り、5号土坑に切られる。規模は径 1.3×1.5 m、深さ0.5mを測る偏円形土坑である。断面台形を呈し、床面は径1.15mの円形を呈する。

出土遺物(第28図、図版13)

1・2は高坏である。1は坏部のみが遺存し、口縁部がわずかに外溝する。内外面共に横方向の丁寧なナデ後縦方向のミガキを施す。2は坏部が楕形を呈する。内外面共にミガキを施す。

時期は、出土遺物と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

8号土坑(第27図、図版11)

調査区の南側に位置し、7号土坑に切られる。規模は径 1.6×1.7 m、深さ0.4mを測る偏円形土坑である。床面は 1.6×1.85 mの楕円形を呈し、一部がオーバーハングする。床面から6cmほど

の間にドングリが出土し、その直上で木製品、枝ならびに木片が出土している。

出土遺物（第28図、図版15）

3は小型の壺か。平底を呈し、外面手持ちのケズリ後ナデ、内面上半ケズリないしは板ナデ、下半指頭圧痕を施す。外面に黒斑が見られる。4は壺である。わずかに平底を呈し、外面ハケ、内面上位不定方向のハケ、中位ケズリ、下位ナデを施す。外面下位に黒斑が見られる。5は甕である。口縁が直線的に外反し、口唇部がわずかに上方に突出する。外面は磨滅のため不明だが、口縁部内面ハケ、胴部内面ケズリを施す。6・7は高坏である。接合はしないものの、同一個体の可能性がある。6は口縁部外面ヨコナデ、胴部外面ハケ一部ミガキ、口縁部内面一部ハケ、胴部内面ハケを施す。7は外面細ハケ及び粗いハケ、内面ナデを施す。三箇所に孔を穿つ。8は支脚である。中央に孔が開き、一方向に突出する。ナデと指頭圧痕で成形する。このほか、後述する木製品が出土している。

時期は、出土遺物と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

9号土坑（第27図、図版12）

調査区の北東側に位置する。規模は $1.4 \times 1.5m$ 、深さ0.4mを測る不正円土坑である。断面台形を呈し、床面は $0.9 \times 1.3m$ の不定形を呈する。南東側に位置するピットからは孔のある厚さ5mmの木質が検出されており、蓋の一部である可能性もある。

出土遺物（第28図、図版15）

9は脚付鉢である。脚部のみが遺存し、緩やかに開く。外面ハケ、脚部内面ハケ後ナデ、胴部内面ミガキを施す。内面に被熱の痕跡が見られる。10は手づくねの鉢である。磨滅するが全体を指ナデで成形する。外面に黒斑が見られる。11・12は調査の過程で8号土坑の出土遺物と混在した甕である。11は口縁が外湾し、端部を丸く仕上げる。口縁部外面ハケ、内面ヨコナデ、頸部ナデ、胴部外面タタキ、内面ナデを施す。内面頸部下に粘土紐の痕跡が見られる。12は口縁が直線的に外反し、端部を四角く仕上げる。外面ハケ、口縁部内面ハケ、頸部内面指頭圧痕、胴部内面ユビナデを施す。口縁部外面に煤が付着する。

時期は、出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

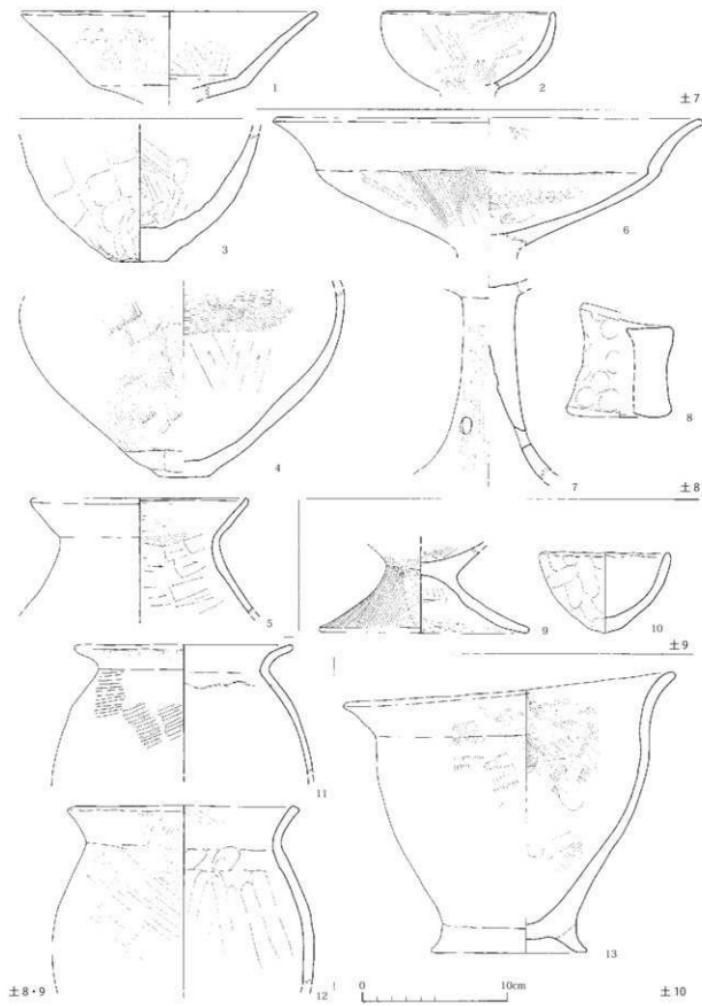
10号土坑（第27図、図版12）

調査区の北西側に位置する。規模は径1m、深さ0.4mを測る円形土坑である。断面台形で床面は径0.8mの円形を呈する。床面は中央に径0.2m、深さ0.07mのピットが作られる。

出土遺物（第28図、図版15）

13は鉢である。低い脚部が付き、口縁は緩やかに外湾する。外面上半ハケ後ナデ、内面上半ハケ後ナデ、下半指頭圧痕を施す。外面下半は剥落のため調整不明である。外面の一部に黒斑が見られる。

時期は、出土遺物から弥生時代終末に属するものと考えられる。



第28図 6-4地区7~10号土坑出土土器実測図(1/3)

(2) 溝

1号溝

調査区の中央を南北に縦断し、2・3号溝、4・5号土坑を切る。規模は長さ $20.5 + a$ m、幅 1.4m、深さ 0.2m を測る。

出土遺物（第 29 図、図版 15）

1～3は壺である。1は口縁がほぼ直立し、端部がやや角張る。口縁部外面に 2列の竹管文、その間に波状文を施す。頭部には×字状のキザミを施した突帯を付す。頭部外面ハケ、口縁部内面ヨコナデ、頭部内面ハケを施す。2は口縁部が強く屈曲し、外方に突出する。口縁部ナデ、頭部にわずかにハケ目が残る。3は素口縁の壺である。口縁が強く外湾し、頭部に断面三角形でキザミを施す突帯を付す。頭部外面にハケ目を施し、他は磨滅のため不明である。4～8は壺である。4は平底を呈し、口縁部ヨコナデ、胴部外面タタキ後一部ハケ、内面ハケを施す。外面の一部に黒斑が見られる。5は平底を呈し、内外面共にハケ、底部内面に工具痕を施す。6・7は直線的に口縁が伸び、6は外面タタキ、口縁部内面ハケ、胴部内面ケズリを施す。7は内外面共にハケを施す。8は平底を呈し中央が凹む。外面は磨滅するがハケが残り、内面ナデを施す。9は高壺である。屈曲部から直立気味に出て外湾する。口縁部外面ナデ、壺部外面ケズリ、内面ナデを施す。10～12は器台である。10は小型で口唇部がやや厚くなる。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面シボリを施す。11は脚部である。脚部が低く、大きく広がる。頭部は棒状を呈し、外面にハケ、内面に工具痕を施す。12は上方の一部が開く器台である。外面ハケ、内面ナデを施す。13は鉢か。脚部のみが遺存し、口唇部が外方に突出する。内外面共にハケ目を施す。14は支脚である。一方向に突出部がつき、外面タタキ、内面エビナデを施す。15は須恵器の壺である。高台が付き、内外面共に回転ナデを施す、混入品か。このほか、後述する石庵丁が出土している。

時期は、出土遺物と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

2号溝

調査区の中央西側に位置し、1号溝に切られる。規模は長さ 2m、幅 0.5m、深さ 0.1m を測る。

出土遺物はないが、切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属するか。

3号溝

調査区の北側に位置し、1号溝に切られる。規模は長さ $15.5 + a$ m、幅 0.7m、深さ 0.1m を測る。

出土遺物（第 31 図）

1は壺である。口縁が直線的に伸び、口唇部を四角く仕上げる。口縁部ヨコナデ、胴部内外面ハケを施す。外面の一部に黒斑が見られる。このほか、後述する磨製石斧・砥石が出土している。

時期は、出土遺物と切り合いから弥生時代終末に属するものと考えられる。

4号溝

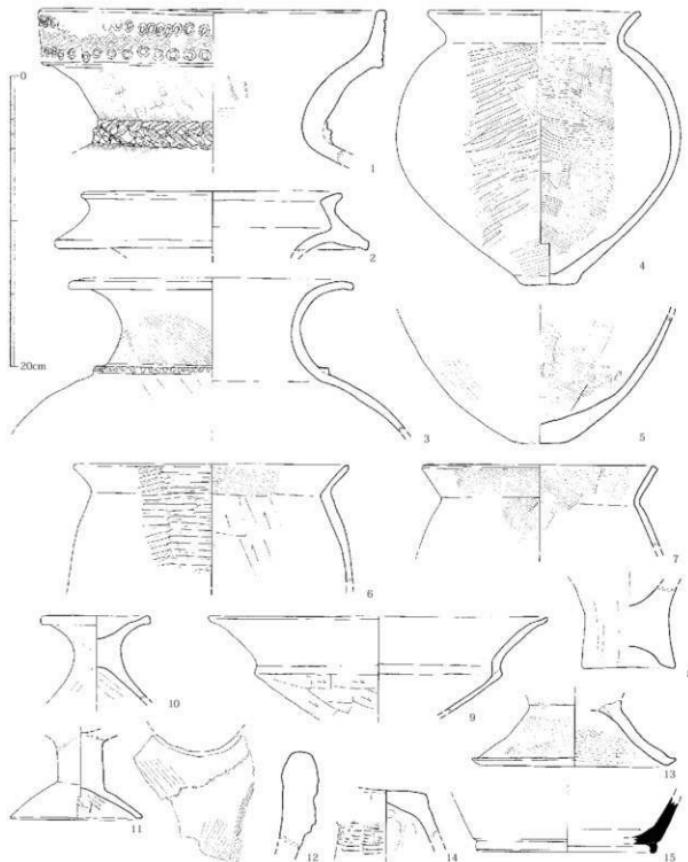
調査区の北西側に位置する。規模は長さ $6 + a$ m、幅 0.6m、深さ 0.1m を測る。

出土遺物（第 31 図）

2は壺である。口縁部が外湾し、口唇部がやや肥厚する。外面ナデを施し、内面は磨滅のため不

明である。他に固化に耐えないが土師器・須恵器の小片が出土している。このほか、後述する砥石が出土している。

時期は、出土遺物から古墳時代初頭～後期に属するものと考えられる。



第29図 6-4地区1号溝出土土器実測図(1/3)

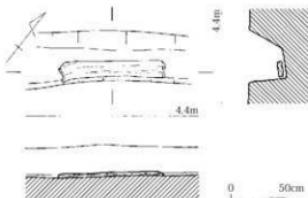
5号溝（第30図）

調査区の南東側に位置する。規模は長さ6.5m、幅0.6m、深さ0.6mを測る。中央やや北よりで長さ100cm、幅15cm、厚さ5cmの板が底部から出土した。周囲に他に木片等はなく性格は不明である。

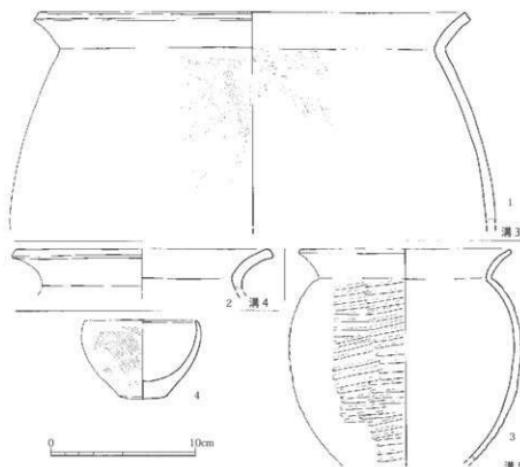
出土遺物（第31図）

3は甕である。口縁がわずかに外湾し、口唇部がわずかに上方に突出する。口縁部ヨコナデ、胴部外面タキ、内面ナデを施す。4は小型の鉢である。口縁がわずかに内湾し、平底を呈する。外面ナデ、内面ナデ、底部内面ハケを施す。外面の一部に黒斑が見られる。

時期は、出土遺物から古墳時代初頭に属するものと考えられる。



第30図 6-4地区5号溝出土状況実測図(1/40)



第31図 6-4地区3~5号溝出土器実測図(1/3)

(3) その他の遺構等の出土遺物（第32図、図版15）

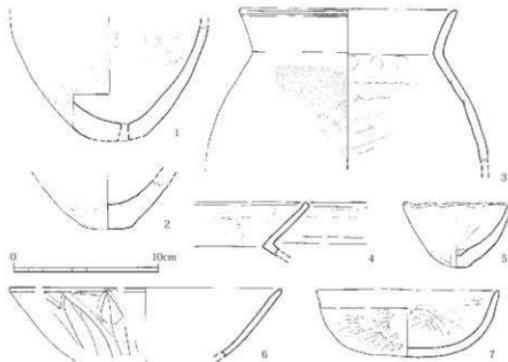
ピット

1は甕である。底部中央からややずれた位置に径5mmの孔を一つ穿つ。内外面ともにハケ後ナデを施す。P.7出土。2は小型壺か。平底を呈し、外面ハケ、内面ナデを施す。P.8出土。3・4は甕である。3は口縁部が直線気味に伸び、端部を丸く仕上げる。口縁部ナデ、胴部外面ハケ、胴部内面上位指頭圧痕、下位工具によるナデもしくはケズリを施す。4は口縁部が直線的に外反し、口

縁部が上方に突出する。外面ヨコナデ、内面ハケ後ナデを施す。共にP-7出土。5はミニチュア土器である。全面を工具ないしは指によるナデで成形する。P-5出土。このほか、図化に耐えないがP-17から綠釉陶器の小片が出土している。

その他

6は青磁碗である。蓮弁文が見られる。表採品。7は土師器榤である。口縁部外面のみヨコナデ、他は細かいミガキを施す。壁面出土。



第32図 64地区その他の遺構出土土器実測図(1/3)

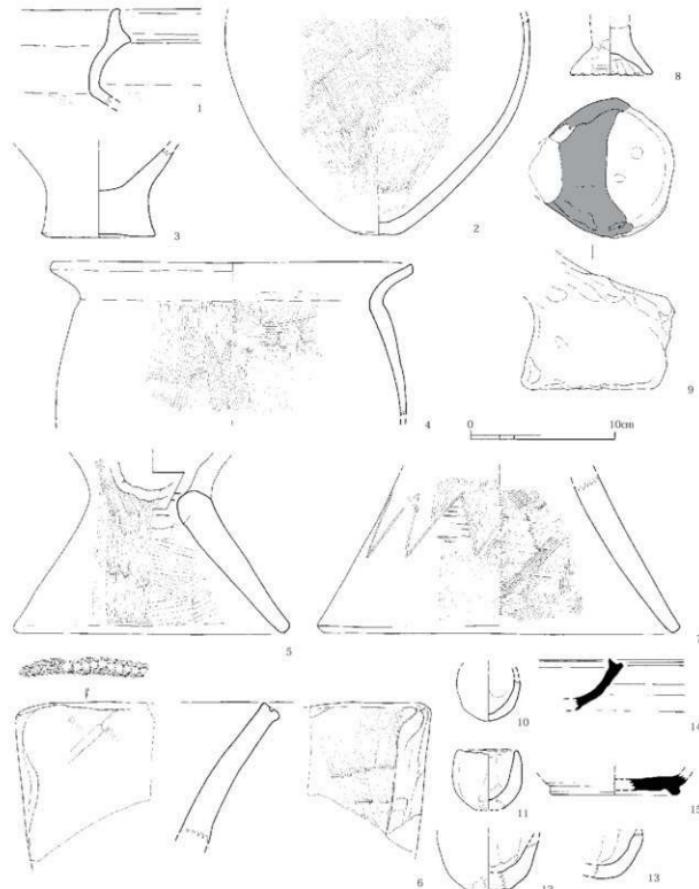
包含層(第33-34図、図版15)

1は壺である。口唇部がわずかに外方に突出し、口縁部ナデ、頸部ハケを施す。2は甕か。底部はわずかに平底気味を呈し、内外面共にハケを施す。底部付近に黒斑、外面の一部に煤が付着する。3・4は甕である。3は底部で平底を呈する。弥生時代中期のものか。4は口縁部が外溝し、口唇部がわずかに上方に突出する。口縁部ヨコナデ、胴部ハケを施す。内面の口縁から胴部にかけて赤化する部分が認められ、化粧土の可能性がある。5～7は器台である。5は上方の一部が開く器台で、くびれ部分の幅が狭い。外面ハケ、内面下位粗いハケ、上位工具によるナデを施す。6・7は胎土から同一個体の可能性がある器台である。6は上方の一部が開く割り込み部分である。口唇部に刺突文を施し、粘土を折り返すことで割り込み部分の面を作る。内外面ともにハケを施す。外面に煤が付着する。7は外面にハケ後鋸歯文、内面ハケを施す。鋸歯文は山形文を上から下に向かって一本ずつ引いた後、横ないしは斜め方向に線を描く。8は器台形のミニチュア土器か。脚部がハ字状に開き、全面をユビナデで成形する。9は支脚である。一方向に突出部を持つ。左側のトーン部分が煤で黒化しており突出部を外側にして使用したものと考えられる。10～13はミニチュア土器である。全てユビナデで成形する。10・13は外面に煤が付着する。14は須恵器の坏身である。回転ナデを施す。15は須恵器の坏である。高台を持ち、回転ナデを施す。16は平瓦である。下面に面取りが残る。外面にタタキを施し、内面布目が残る。17は綠釉陶器碗である。磨滅のために剥離

が激しいが、全面に施釉されていたものと考えられる。底部に回転ヘラ切りの痕跡がある。土師質で、平安時代初期頃のものか。

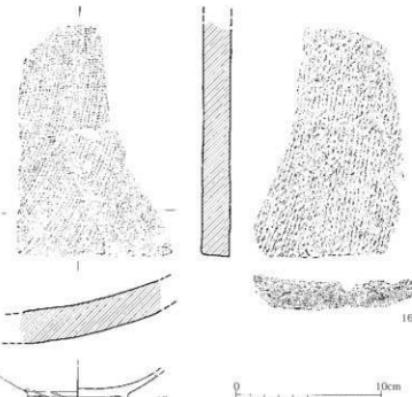
特殊遺物（第35・36図、図版16）

ここでは、各地区で出土した特殊遺物についてまとめて報告する。1は土錘である。磨滅が著しく、

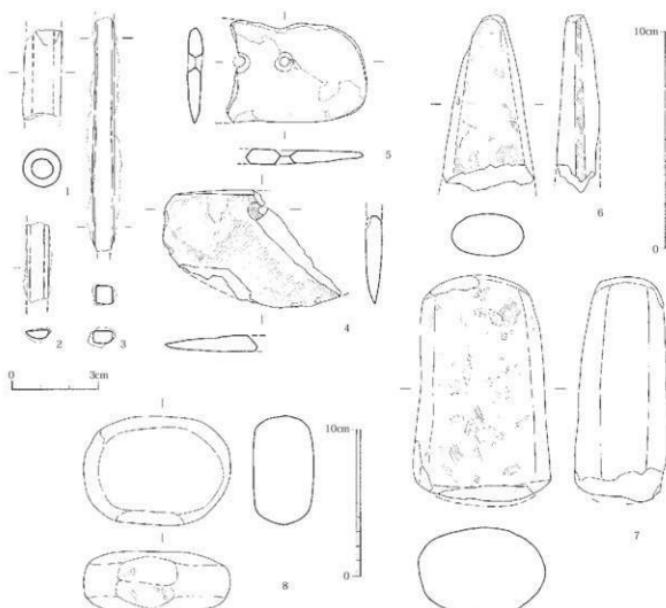


第33図 6-4地区包含層出土土器実測図① (1/3)

黄色を呈する。6 - 4 地区 6 号土坑出土。2 はヤリガンナか。腐食が進み、残りが悪いが、中央がわずかに凹む。6 - 2 地区 5 号土坑から出土しており、副葬品か。3 は鉄鏃か。基部のみが遺存しており、尖根式と考えられる。6 - 2 地区 5 号住居跡出土。4・5 は石庖丁である。4 は外湾刀半月形で内孔 0.5cm、外孔 0.9cm、背孔 0.9cm を測る。長さが 5.4cm と大きく使用頻度は少ないか。6 - 4 地区 1 号溝出土。5 は杏仁形で、内孔 0.45cm、外孔 0.85cm、背孔 1.6・1.9cm、孔間 2.1cm を測る。右孔にわずかに紐ズレ様の痕跡が認められる。6 - 4 地区

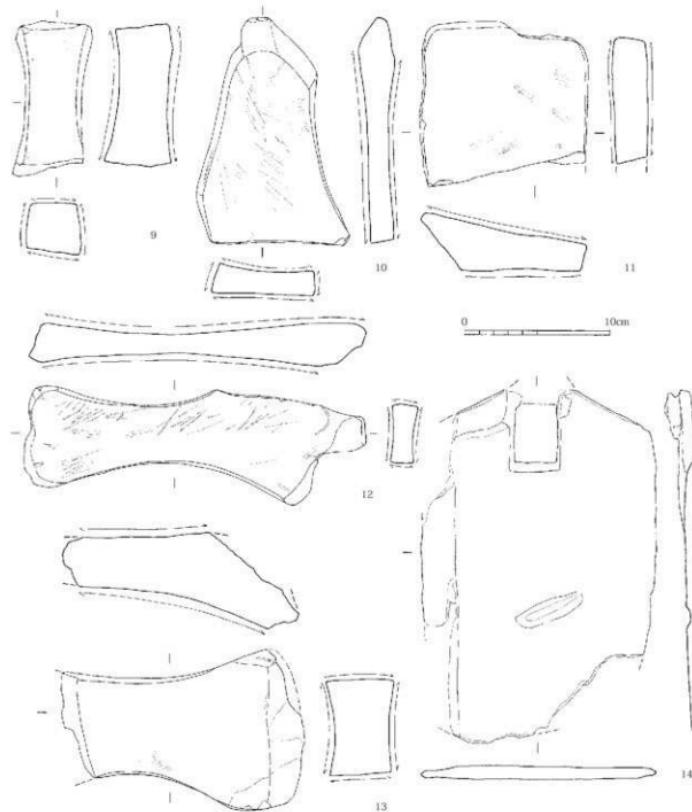


第 34 図 6-4 地区包含層出土土器実測図② (1/3)



第 35 図 6 地区出土特殊遺物実測図① (1~3 は 2/3、4~7 は 1/2、8 は 1/3)

区2号土坑出土。6・7は磨製石斧である。6は乳棒状を呈し、側面がわずかに面取りされる。蛇紋岩製である。6-4地区3号溝出土。7は太型蛤刃石斧で、全面に敲打・研磨痕が認められる。刃部と考えられる研磨が下部に見られるが角度が鈍い。石斧として短くなったために、すり石などとして再利用したものか。試掘時出土。8はすり石である。上面ならびに下側面をすり面とする。凝灰岩製である。6-4地区2号土坑出土。9～13は砥石である。9は4側面を砥面とするが、研磨痕は不明瞭である。砂岩製である。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。6-4地区3号溝出土。10は4側面を砥面とし、下側面を研磨面取りする。泥岩製である。石質と大きさから



第36図 6地区出土特殊遺物実測図② (1/3)

置き砥の仕上げ砥と考えられる。6-4地区3号溝出土。11は上下面のみ砥面とする。砂岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。6-4地区P-4出土。12は4側面を砥面とし、泥岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。6-4地区4号溝出土。13は4側面を砥面とし、砂岩製である。石質と大きさから置き砥の仕上げ砥と考えられる。6-4地区4号溝出土。14は不明木製品である。上側に4×3cm程度の方形の穴が開いており、側縁付近は1cm内外高くなる。鉢になるか。6-4地区8号土坑出土。

(4) 小結

6-4地区は主として弥生時代終末～古墳時代初頭にドングリピットを中心として遺構が展開する。実際にドングリが出土した土坑は10基中3基だが、土坑の構造や時期の同時性などから、他の土坑もドングリピットとして利用されていたものである可能性がある。しかしながら、それ以降はほとんど土地利用の痕跡が認められない。このことから、時期を通じて水が湧く低地であり、他の用途に向かない土地であった可能性が指摘できる。

第2表 上片島遺跡群6地区出土特殊遺物一覧表

掲図	番号	国版番号	地区	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存	備考
35	1	16	4	6号土坑	土製品	土鍤	(3.10)	1.30		(382)	0.6	
35	2	16	2	5号土坑	鉄製品	ヤリガンナ	(2.70)	0.80	0.30	(1.16)	0.1	
35	3	16	2	5号住居跡	鉄製品	鉄鍤?	(8.00)	0.70	0.70	(13.16)	0.6	
35	4	16	4	1号溝	石製品	石庖丁	5.40	(8.10)	0.75	(39.22)	0.5	片岩
35	5	16	4	2号土坑	石製品	石庖丁	4.70	(6.40)	0.70	(24.86)	0.6	泥岩
35	6	16	4	3号溝	石製品	石斧	(8.10)	(4.20)	2.00	(86.61)	0.6	蛇紋岩
35	7	16	1	試掘時	石製品	石斧	(10.50)	6.30	4.30	(492)	0.8	礫灰岩
35	8	16	4	2号土坑	石製品	すり石	10.05	7.50	4.35	575	完形	礫灰岩
36	9	16	4	3号溝	石製品	砥石	10.75	5.25	4.70	348	完形	砂岩
36	10	16	4	3号溝	石製品	砥石	15.60	10.50	2.60	459	完形	泥岩
36	11	16	4	P-4	石製品	砥石	(11.60)	9.20	4.00	(612)	0.5	砂岩
36	12	16	4	4号溝	石製品	砥石	23.70	7.90	2.95	570	完形	泥岩
36	13	16	4	4号溝	石製品	砥石	(16.80)	11.00	6.70	(1099)	0.5	砂岩
36	14	16	4	8号土坑	木製品	鉢?	24.20	16.20	1.90		0.7	

() は残存値

IV 科学分析

上片島遺跡群 6 地区の種実同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、上片島遺跡（福岡県京都郡苅田町上片島）の弥生時代終末期のドングリビットから出土した種実（ドングリ）の同定を実施し、当時の植生や植物利用に関する資料を得る。

(1) 試料

試料は、弥生時代終末期のドングリビットから無作為に採取された種実（ドングリ）で、水浸の状態で容器に入っている。種実同定は、300個を対象に実施する。

(2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。同定が可能な種実遺体を拾い出し、表面の泥を種実が壊れないように除去する。種実遺体の同定は、現生標本および岡本（1979）、石川（1994）、中山ほか（2000）、伊藤（2001）、徳永（2004）、小畠ほか（2003）、小畠（2011）等を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表に示す。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れて約70%のエタノール溶液で保存し、残試料とともに返却する。

(3) 結果

同定結果を第3表に示す。種実（ドングリ）は、イチイガシの果実が286個、果実・殻斗が2個、アカガシ・ツクバネガシの果実が68個と、アカガシ亜属の殻斗が2個、コナラ属の子葉が5個の、計363個が同定された。

ドングリ以外の分類群は、栽培種のモモの核の破片が1個と、イネの穎果の破片が8個確認された。その他に、落葉つる性木本のマタタビ近似種の種子、草本のイネ科の果実、ホタルイ近似種の果実、カヤツリグサ属の果実、チドメグサ属の果実、イヌコウジュ属の果実が確認されたため、結果表の下に括してプラス「+」で示している。主な分類群の写真を文中図版1～3に示し、以下に形態的特徴等を述べる。なお、種実遺体の計測値は、デジタルノギスを使用した。

〈ドングリ〉

・イチイガシ (*Quercus ilicifolia* Blume) ブナ科コナラ属アカガシ亜属：文中図版1

出土果実は全て成熟個体で、殻斗がついた果実も2個（文中図版1-14,15）確認された。完全な形状をとどめる個体が多く、脆弱な柱頭部分が残る個体（文中図版1-No.1～13）も確認されるため、良好な保存状態と判断される。

果実は暗灰褐色、長さ14～21cm、径0.8～1.3cmの両端がやや尖る卵状楕円体で、果実の長さの半分付近で最大径となる個体が多い。果皮表面は平滑で、浅く微細な溝が縦列する。果実頂端には細長い花柱が突出し、花柱頂部にある柱頭の先端部は3つに分かれ、傘状で外側を向く（文中図版1-No.1e,No.2aなどで顕著）。花柱基部（首）には殻斗の圧痕である輪状紋があり、果実上部（肩）にかけて星状毛が残る個体もみられる（文中図版1-No.1d,eなど）。果実基部は突出し、果皮とは別組織の灰褐色、径5～6mmの円形の着点（臍）がある。殻斗は灰褐色、長さ6mm、径10mmと、

第3表 種実定同結果

分類群	部位	状態	個数	備考
ドングリ類				
イチイガシ	果実	柱頭残存 柱頭欠損	13 230	13個計測対象 100個計測対象
アカガシ・ツクバネガシ	果実・殻斗 果実	柱頭欠損 柱頭欠損	2 49	20個計測対象
アカガシ亜属	殻斗	柱頭欠損	2	
コナラ属	子葉	柱頭欠損	1	
		破片	4	
合計			363	
栽培種				
モモ	核	破片	1	
イネ	穎果	破片	8	1個先端部、1個基部
その他				
マタタビ近似種	種子		+	
イネ科	果実		+	
ホタルイ近似種	果実		+	
カヤツリグサ属	果実		+	
チドメグサ属	果実		+	
イスコウジュ属	果実		+	

長さ7mm、径11mmの橢型で、果実の下半分～1/3を包む。殻斗は木質で、表面には5～6段の輪状紋がある。

柱頭が残る果実13個(文中図版1-No.1～13)の計測値は、長さ(果実長)が最小13.6～最大20.1(平均17.47 ± 標準偏差1.97)mm、径(果実径)が10.8～12.6(平均11.62 ± 0.58)mm、脇の直径(脇径)が4.1～5.9(平均4.81 ± 0.59)、花柱の長さ(花柱長)が1.9～3.4(平均2.81 ± 0.45)mm、最大径(花柱径)が1.3～2.0(平均1.77 ± 0.23)mmであった(第37図、第2表)。また、柱頭を欠損する果実100個の計測値は、果実長が13.6～21.4(平均17.29 ± 1.64)mm、果実径が8.2～13.4(平均10.84 ± 1.03)mm、脇径が3.1～6.7(平均4.64 ± 0.70)、花柱長が1.1～3.3(平均2.05 ± 0.40)mm、花柱径が1.1～2.4(平均1.48 ± 0.23)mmであった(第37図、第4表)。

全113個の計測値をもとに、果実の長さと径を乗じた値(果実長×果実径)は120～264(平均190.1 ± 30.6)、果実の長さと径の比率(果実長/果実径)は1.1～2.0(平均1.59 ± 0.15)、脇の直径が果実の最大径に占める比率(脇径/果実径)は0.3～0.6(平均0.43 ± 0.06)、花柱の最大径が果実の最大径に占める比率(花柱径/果実径)は0.1～0.2(平均0.14 ± 0.02)、花柱の長さが果実の長さに占める比率(花柱長/果実長)は0.1～0.2(平均0.12 ± 0.03)であった(第37図、第4表)。

第4表 出土ドングリの大きさ

分類群	標本数 (n)	果実長 (mm)			果実径 (mm)			脇径 (mm)			花柱長 (mm)			花柱径 (mm)							
		最小	最大	平均	標準 偏差	最小	最大	平均	標準 偏差	最小	最大	平均	標準 偏差	最小	最大	平均	標準 偏差				
イチイガシ(全体)	113	13.6	21.4	17.31	1.67	8.2	13.4	10.93	1.02	3.1	6.7	4.66	0.69	11	3.4	2.14	0.47	11	24	152	225
イチイガシ(柱頭残存)	13	13.6	20.1	17.47	1.97	10.8	12.6	11.62	0.58	4.1	5.9	4.81	0.59	19	3.4	2.81	0.45	13	20	177	23
イチイガシ(柱頭欠損)	100	13.6	21.4	17.29	1.64	8.2	13.4	10.84	1.03	3.1	6.7	4.64	0.70	11	3.3	2.05	0.40	11	24	148	23
アカガシ・ツクバネガシ(柱頭欠損)	20	16.0	21.7	18.54	1.28	9.9	13.8	11.68	1.31	4.0	5.7	4.79	0.44	14	3.0	2.21	0.43	21	32	268	28
		果実長 × 果実径			果実長 / 果実径			脇径 / 果実径			花柱長 / 果実長			花柱径 / 果実長							
分類群	標本数 (n)	最小	最大	平均	標準 偏差	最小	最大	平均	標準 偏差	最小	最大	平均	標準 偏差	最小	最大	平均	標準 偏差				
イチイガシ(全体)	113	12.0	20.4	19.01	3.06	1.1	20	15.9	0.15	0.3	0.6	0.43	0.06	0.1	0.2	0.14	0.02	0.1	0.2	0.12	0.03
イチイガシ(柱頭残存)	13	16.3	20.1	20.32	2.66	1.1	17	15.1	0.18	0.3	0.5	0.42	0.06	0.1	0.2	0.15	0.02	0.1	0.2	0.16	0.03
イチイガシ(柱頭欠損)	100	12.0	26.4	18.84	3.07	1.2	20	16.0	0.14	0.3	0.6	0.43	0.06	0.1	0.2	0.14	0.02	0.1	0.2	0.12	0.02
アカガシ・ツクバネガシ(柱頭欠損)	20	17.4	28.3	21.71	3.31	1.4	21	16.0	0.17	0.3	0.5	0.41	0.04	0.2	0.3	0.23	0.03	0.1	0.2	0.12	0.02

・アカガシ (*Quercus acuta* Thunb. ex Murray) - ツクバネガシ (*Quercus sessilifolia* Blume)
ブナ科コナラ属アカガシ亜属：文中図版2

出土果実は、イチイガシと同様に全て成熟個体で、完全な形状をとどめる個体が多く、良好な保存状態と判断される。果実は暗灰黒褐色、イチイガシよりもやや大型の倒卵状橢円体で、果実の長さの上半部で最大径となる。果皮はイチイガシよりも厚く、表面にはイチイガシよりも縦溝が太く深く目立つ。乾燥により果皮が取縮し、縦溝に沿って裂開した可能性がある。果実頂端には、太い花柱基部（首）の輪状紋が突出し、花柱頂部の柱頭が徐々に聞く細長い3花柱の基部のみが0.5mm程度残る（文中図版2-No.1d,No.2a）。果実基部は概ね切形で、灰褐色、径4～6mmの円形の臍がある。

状態が良好な果実20個の計測値は、果実長が16.0～21.7（平均 18.54 ± 1.28 ）mm、果実径が9.9～13.8（平均 11.68 ± 1.31 ）mm、臍径が4.0～5.7（平均 4.79 ± 0.44 ）、花柱長が1.4～3.0（平均 2.21 ± 0.43 ）mm、花柱径が2.1～3.2（平均 2.68 ± 0.28 ）mmで、果実長×果実径は174～283（平均 217.1 ± 33.1 ）、果実長／果実径は1.4～2.1（平均 1.60 ± 0.17 ）、臍径／果実径は0.3～0.5（平均 0.41 ± 0.04 ）、花柱径／果実径は0.2～0.3（平均 0.23 ± 0.03 ）、花柱長／果実長は0.1～0.2（平均 0.12 ± 0.02 ）であった（第37図、第4表）。イチイガシとは、果実長／果実径、臍径／果実径、花柱長／果実長に大差はないが、果実長×果実径と花柱径／果実径で明瞭な差異が認められる（第37図下）。

出土果実は、長崎県伊木力遺跡の曾畠式土器（繩文時代前期）出土層（Ⅷ層）や轟式土器（繩文時代前期）出土層（Ⅸ層）より出土したアカガシ近似種の果実（南木・粉川,1990）や、鳥取県文殊領遺跡（弥生時代）のアカガシ亜属（イチイガシやアラカシ以外）の果実（パリノ・サーヴェイ株式会社,2010）に似る。ただし、アカガシの果実とツクバネガシの果実との判別は困難であるため、本報告では両種をハイフォンで結んでいる。

・アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属：文中図版3-1

殻斗は灰褐色、長さ8mm、残存径10mmの椀型で、表面に5～6段の輪状紋がある。基部には径3.5mm、残存長5.5mmの果柄がある。上述のイチイガシ、またはアカガシ・ツクバネガシに由来する可能性が高い。

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科：文中図版3-2.3

果室内に1個入る子葉は、灰褐色、長さ9mm、径3.8mm（文中図版3-2）、長さ6mm径4.2mm（文中図版3-3）の卵～橢円体で、2枚からなる子葉の合わせ目に沿って縦半分に割れた破片もみられる。子葉は極めて脆弱で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。イチイガシやアカガシ・ツクバネガシに由来する可能性が高い。

〈栽培種〉

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核（内果皮）は灰褐色、完形ならば、やや偏平な広橢円体で頂部が尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帶状部がある。

出土核は、縫合線に沿って割れた半分未溝の破片で、頂部をやや欠損する残存長は20.9mm、残存幅は17.5mm、半分厚は7.6mmを測る。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。核内面は平滑で、1個の種子が入る残存長18.9mm、残存幅11.1mmの卵形の窪みがある（文中図版3-4）。

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

穎果は淡～灰褐色、完形ならば、長さ6.0～7.5mm、幅3.0～4.0mm、厚さ2.0～3.0mmのやや偏平な長楕円体で、基部に径1.0mm程度の斜切状円柱形の果実序柄（小穂軸）と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稲穂を構成する。果皮は薄く、表面には微細な顆粒状突起が縱列する。穎は全て破片で、先端部が1個（文中図版3-5）、基部が1個（文中図版3-6）確認された。出土穎の大きさは、最大23mmを測る。

(4) 考察

弥生時代終末期のドングリピットより出土したドングリは、イチイガシの果実を主体（全体の約8割）とし、アカガシ・ツクバネガシの果実が2割程度混じる組成が確認された。

イチイガシやアカガシ、ツクバネガシは、高木になる常緑広葉樹で、現在の本地域にも分布する。イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壤をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する。ツクバネガシは、山地の沢沿いの急斜面を好んで生育する傾向があり、アカガシは、しばしば温帯域に生えるブナと接して生えるように、山の斜面のかなり高いところにも生育する。アカガシとツクバネガシの種間雜種と考えられる個体もあり、特に混生地に多い。当時の本遺跡周辺にも、イチイガシやアカガシ・ツクバネガシが生育する常緑広葉樹林（照葉樹林）が存在したと考えられる。

また、これらの堅果（ドングリ）は、内部の子葉が食用可能で収量も多く、長期保存が可能である。ドングリピットより出土した果実は、殆どが成熟個体から成り、食用にならない部位は殻斗がわずかに確認されるのみであったことから、当時の本遺跡周辺の照葉樹林より成熟果実が選択的に採取され、遺構内に持ち込まれた植物質食料であることが示唆される。また、完全な形状をとどめた果実が多く、稀な子葉の残存も確認されることから、良好な保存状態であったと判断され、遺構内の嫌気的環境下で食用されることなく埋積したと考えられる。

最も多く確認されたイチイガシは、子葉があく抜きせずに生食可能であるため、西日本の遺跡を中心に果実や炭化子葉の出土例が多い（渡辺, 1975; 国本, 1979など）。九州地方の遺跡出土ドングリ事例の集成結果（小畠, 2006:2011）でも、イチイガシが圧倒的に多い結果が得られており、今回の結果と調和的である。

一方、アカガシやツクバネガシの果実は、水にさらすなどのあく抜きをすることで子葉が食用可能となる。九州の出土ドングリ集成（小畠, 2006:2011）では、アカガシの出土例はごく少数で、ツクバネガシは皆無であった。

あく抜き不要のイチイガシを主体とし、あく抜きが必要なアカガシ・ツクバネガシが少量混じる出土組成に関して、小畠（2006:2011）は、調理方法が異なる複数種のドングリを混合貯蔵した可能性に否定的な見解を示し、紛れ込みの可能性を指摘している。ドングリピット内に複数種のドングリを混合貯蔵したか、紛れ込んだかについては、分析結果のみで判断することはできないため、発掘調査所見や上述の指摘事項と併せて評価することが望まれる。

今回の試料でドングリ以外の分類群としては、栽培種のモモとイネが確認された。果樹のモモや穀類のイネが周辺で栽培されていたのか、近辺より持ち込まれたかについては不明であるが、ドングリとともに利用された当時の植物質食料であることは想定可能で、遺構内への投棄または埋納な

どの人為的行為に由来する可能性もある。なお、栽培種を除いた分類群は、抽水性草本のホタルイ(近似種)、湿った場所にもやや乾いた場所にも生育可能な中生植物のイネ科、カヤツリグサ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属や落葉つる性木本のマタタビ(近似種)などの種実が確認された。これらは、当時の調査区周辺域の明るく開けた草地環境や、森林の林縁などに生育していたと考えられる。

【参考文献】

- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会 .p328.
- 伊藤ふくお 2001 「どんぐりの図鑑」 (北川尚史監修) トンボ出版 .p79.
- 南木睦彦・鈴川昭平 1990 「伊木力遺跡の大型植物化石群集」「伊木力遺跡 長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査」(同志社大学考古学研究室編) 多良見町教育委員会 .pp.642-659.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 「日本植物種子図鑑」 東北大出版会 .p642.
- 小畠弘己・坂本紀乃・大坪志子 2003 「考古学者のためのドングリ識別法」「先史学・考古学論究IV」 龍田考古会 . pp.225-288.
- 小畠弘己 2006 「九州縄文時代の堅果類とその利用－東北アジアの古民族植物学的視点より－」「九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物」 第16回九州縄文研究会大分大会発表主旨・資料集成 .pp.31-40.
- 小畠弘己 2011 「東北アジア古民族植物学と縄文農耕」 同成社 .p309.
- 岡本素治 1979 「遺跡から出土するイチイガシ」 『大阪市立自然史博物館業績』 第230号 .pp.31-39.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2010 「古環境調査」「文殊領遺跡発掘調査報告書II - 町道山村文殊領線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 」 大山町文化財調査報告書第7集 大山町教育委員会 . pp.52-82.
- 徳永桂子 2004 「日本どんぐり大図鑑」 偕成社 .p156.
- 渡辺 誠 1975 「縄文時代の植物食」 雄山閣出版 .p187.

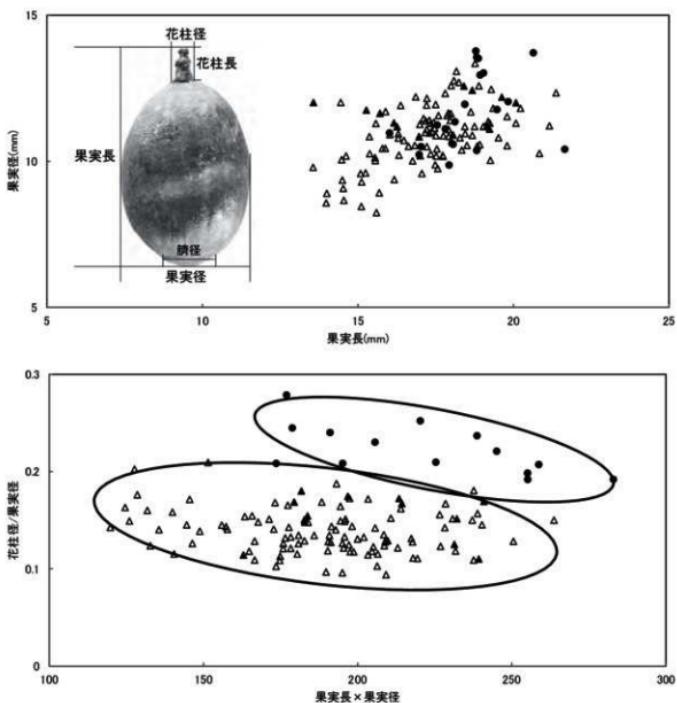


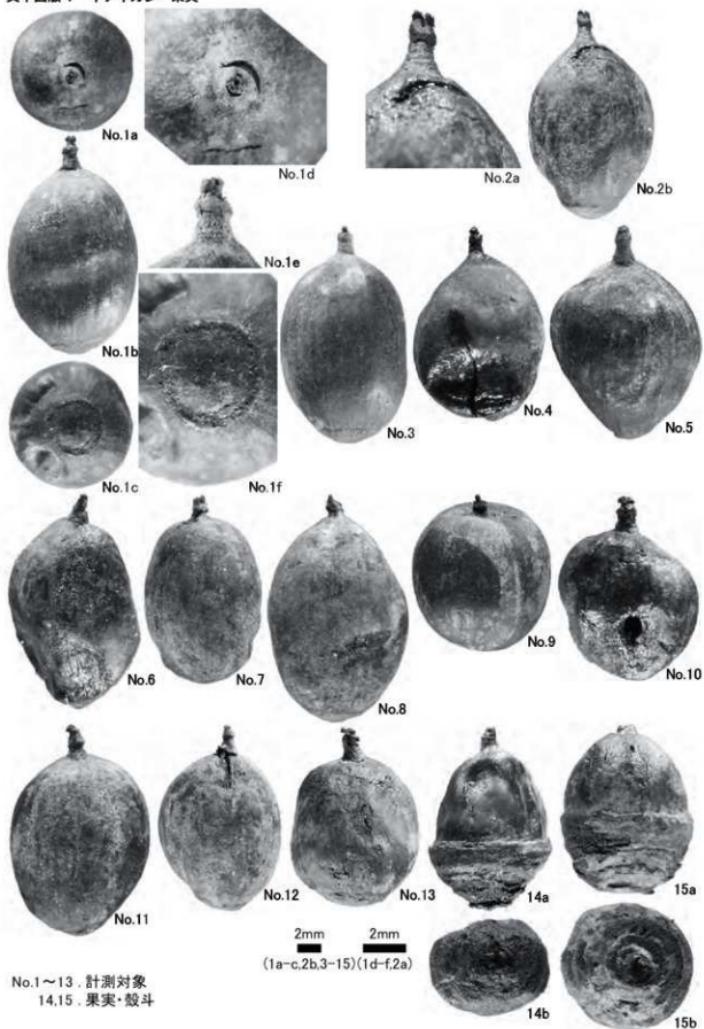
図1. 出土ドングリの大きさ

▲:イチイガシ(柱頭残存) △:イチイガシ(柱頭欠損) ●:アカガシ・ツクバネガシ

第37図 出土ドングリの大きさ

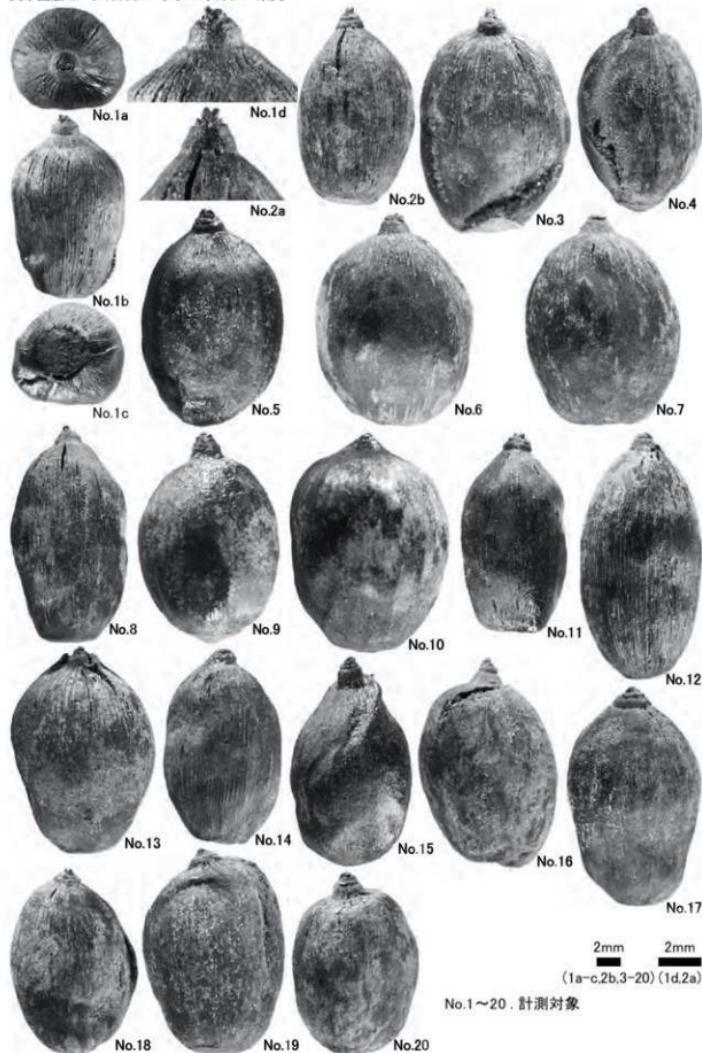
▲:イチイガシ(柱頭残存) △:イチイガシ(柱頭欠損) ●:アカガシ・ツクバネガシ

文中図版1 イチイガシ 果実



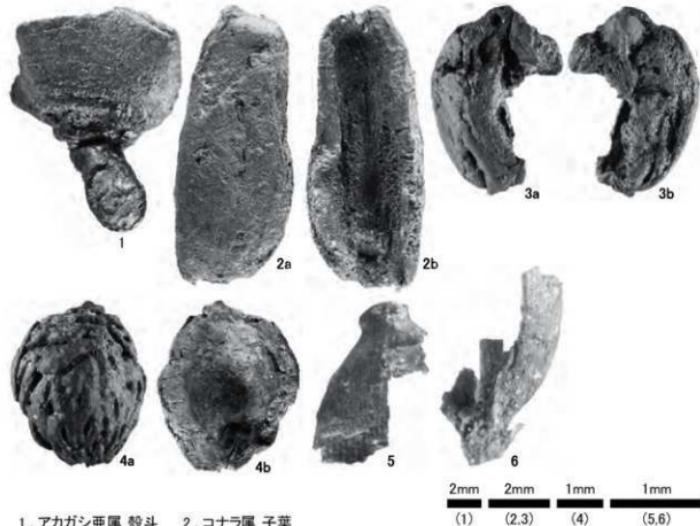
No.1~13. 計測対象
14,15. 果実・殻斗

文中図版2 アカガシーツクバネガシ 果実



No.1~20. 計測対象

文中図版 3 種実遺体



1. アガシ亞属 菓斗
2. コナラ属 子葉
3. コナラ属 子葉
4. モモ 核
5. イネ 鞘(先端部)
6. イネ 鞘(基部)



第38図 上片島遺跡群6地区周辺地形復元図(1/500)

V まとめ

1 周辺地形について

上片島遺跡6地区は、6-1・4地区が低地、6-2・3地区が丘陵上部と地形の環境が異なる地点の調査を行った。調査の結果を踏まえ、試掘調査の状況なども参考に地形を復元したものが第38図である。現地形とは異なり丘陵部分が西方にあり、低地との比高差は1~3mである。丘陵上で検出された遺構に関しては、先にも述べたように、丘陵上の他の調査地点とほぼ同じ様相を示しており、丘陵全体に弥生時代後期~古墳時代、中世にかけて遺跡が展開していたと考えられる。

一方、南北2ヶ所の低地において溝・土坑などの遺構が検出された。中央部分および南北端は試掘調査の結果、遺構は発見されておらず、路線内に関してはこの2ヶ所のみ遺構が作られていたものと考えられる。また、東九州自動車道における調査では丘陵の落ち際や斜面部分で、同様に発掘調査、低地では試掘調査を行ったが、標高4m前後の低地部分では遺構の検出はなく、土器等がわずかに見られたにとどまる(城門編2013)。東西600m、南北400mほどの丘陵の中で、周囲全体の調査を行ったわけではないが、北側には小波瀬川、南側では河川堆積物と考えられる土層が認められたことから、南北両側にはほとんど遺構がない可能性が高い。つまり当該調査区のほかに低地の遺構の存在が考えられるのは、西側・本調査地点北側から小波瀬川までの約200mの間であると考えられる。低地の遺構は、ドングリビットの存在から、弥生時代後期~古墳時代初頭に関しては、當時も水が湧いていたものと考えられ、「水場」であったと言える。その後の時期に関しては、上面の包含層に弥生時代後期~古墳時代初頭を中心とした時期の土器が包含されていること、6-3地区で検出された古墳時代後期に属する1号住居跡が包含層を切って作られていることから、上面からの土砂により埋没していた可能性が高い。

第5表 県内検出ドングリビット一覧表

遺跡名	市町村	時期	基数	種実	備考	報告書
正福寺	久留米市	縄文時代後期	49	イチイガシ、シイ、クヌギ。ナラガシワなど		熊代ほか編2008
野多目括渡	福岡市	縄文時代後期初頭	1	イチイガシ		大庭編1993
野多目括渡	福岡市	縄文時代後期~晩期	4	イチイガシ		小林ほか編1987
高津尾	北九州市	縄文時代後期?	1			山口編1989
上清水	北九州市	縄文時代晩期中葉	1			柴尾編1993
重留	北九州市	弥生時代前期~中期	2	イチイガシ、スダジイ、ツツジ、アラカシ?、センダン、エゴノキ		佐藤編2002
長野小西田	北九州市	弥生時代前期末~後期	3	イチイガシ、シラカシ、アカガシ	他に水さらし場あり	前田ほか編2001
貝元	筑紫野市	弥生時代中期初頭	1	炭化したイチイガシ	裏から出土	中間ほか編1999
中貫ミカシキ	北九州市	弥生時代中期初頭~前半	1	炭化したコナラ属、イチイガシ、イネ		前田ほか編2005
立屋敷	水巻町	弥生時代後期中頃	1+	イチイガシ、ヒヨウタン		大坪編1997
門田	春日市	弥生時代終末	11	イチイガシ、ツバキ、エゴノキ	2群にわかれれる	井上編1979
古賀前	久留米市	弥生時代終末	2			小澤ほか編1998
雄川	太宰府市	弥生時代後期後半~古墳時代初頭	1			山村編1996
湯納	福岡市	不明	1			栗原編1976
長田	朝倉市	縄文時代後期	3	イチイガシ、カヤノミ、クス、シラカシ、クヌギ	2群にわかれれる	井上編1994
上片島	苅田町	弥生時代終末~古墳時代初頭	3	イチイガシ、アカガシ、ツクバネガシ	2群にわかれれる	本書
伊良原	みやこ町	縄文? 中世?				本館調査
皿山古墳群	上毛町	弥生時代中期	4		炭化ドングリ	本館調査

2 ドングリピットについて

6-4地区において2群に分かれて検出された。明確にドングリが出土したものは3基であるが、土坑の構造、時期から同様の遺構であったと考えられ、その場合南北5基ずつとなる。ここでは県内の検出例を概観した上で、本遺跡の様相を明らかにしていきたい。

第5表は県内のドングリピット検出例である。多量に検出された久留米市正福寺遺跡を除けば、10基を大きく超えて検出された例は見当たらない。時期は縄文時代後期～晩期の例が3遺跡54基、弥生時代前期～中期の例が4遺跡7基、後期～古墳時代初頭の例が5遺跡18基である。地域的には福岡、北九州、南筑後など県内各地で検出されており、開発のため発掘調査が多い地域で比較的多く見つかっているという印象を受ける。

種実に関してはほぼ全ての遺跡で灰汁抜きが不要なイチイガシがいずれの時代・地域でも主体をなし、ほかの種実は数点程度である。

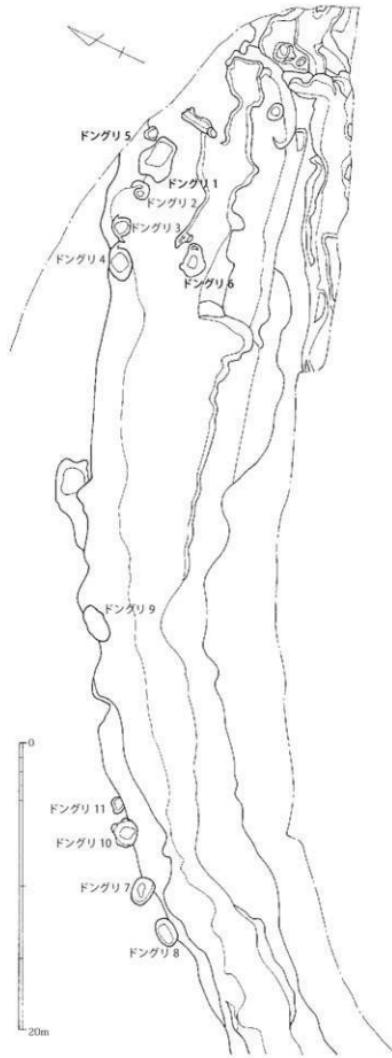
現在検出されている例では縄文時代に統いて弥生時代後期～古墳時代初頭の例が多いが、全体的な検出例の少なさから、現状では縄文時代後期以降弥生時代終末、古墳時代初頭に至るまで各地で作られ、イチイガシを水漬けもしくは貯蔵していたと指摘するに留めたい。

以下に県内検出ドングリピット例と比較した上で本遺跡の特徴を検討したい。

時期に関しては、当該時期のドングリピットは県内でも5遺跡18基検出されており、地域に関しても県内の動向と同じであると言える。

種実に関してはイチイガシが主体をなすことに関しては同一であるものの、灰汁抜きが必要なアカガシ・ツクバネガシが2割程度混在していた。IV章の科学分析によれば、九州出土のアカガシはごく少数で、ツクバネガシは皆無であることから、2割・68点も入っていることは異質であると言える。また、小畠弘己氏により調理方法が異なる種類のドングリの混合貯蔵が見られた場合、紛れ込みの可能性が指摘されている。本遺跡の土坑から出土したドングリはいずれも上層埋土によってパックされており、後世に混入した可能性はほとんどない。土坑築造時に混入した可能性は皆無では無いとは言え、他の遺跡での検出例が数点程度なのに対し、本遺跡ではかなりの量が検出されている。よもや混在を避けるような種実の貯蔵施設を混入が起こりやすい場所にあえて築造することは考えにくいことから、本遺跡検出例については、あえて灰汁抜きが必要な種実も共に貯蔵していたと考えられる。その場合、食に供するためには、全ての種実の灰汁抜きもしくは選別が必要となるため、そのようなコストを厭わなかった可能性、誤って異なる種類の種実を入れてしまったことから廃棄した可能性が考えられる。しかしながら、いずれも他の種実が混入している例が希少であることから積極的に首肯しがたい。現段階では「灰汁抜き不要なイチイガシと灰汁抜きが必要な種実が混在して出土した」という事実の指摘のみに留め、類例の検出を待つこととした。

最後に遺跡内での位置について、弥生時代終末期のドングリピットが11基検出されており、2群に分かれる点も本遺跡検出例と類似している春日市門田遺跡と比較したい（第39図）。門田遺跡では6基と5基で2群に分かれており、200mほど離れている。図面を見る限りでは、2群間に地形的な制約はないように感じられ、ドングリピットをこれ以上作ることも可能であると考えられる。一方、本遺跡では、ドングリピット群の距離がおよそ17m離れており、2基と1基（土坑の数では5基ずつ）の2群に分かれている。丘陵側が調査区外となっているため不明な点も多いが、6-4地区中央部分ではドングリピットが検出されず、上面包含層の土器量も少なかったため、あえて



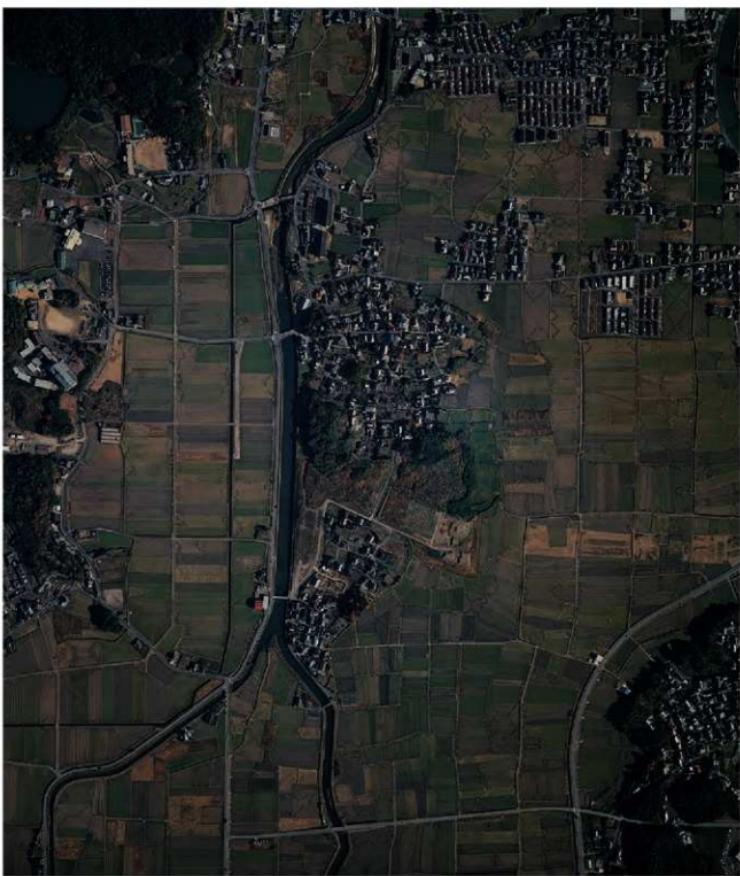
第39図 春日市門田遺跡遺構配置図（1/300、井上編 1979 より転載）

間を開けて作っていた可能性と各群のドングリピットへのアクセス路が異なっていた可能性が指摘できる。また、門田遺跡と同じく丘陵下にはピットを増やすための土地は残っていることから、弥生時代以降には、同じ場所に作る場合には多くても 6 基前後であったという観念が存在していた可能性もある。

【参考文献】

- 井上裕弘編 1979 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第 11 集」福岡県教育委員会
井上裕弘編 1994 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 30」福岡県教育委員会
大坪剛編 1997 「立屋敷遺跡（第 3 次）」水巻町文化財調査報告書第 5 集 水巻町教育委員会
大庭康時編 1993 「野多目括渡遺跡 4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 333 集 福岡市教育委員会
小澤太郎はか編 1998 「上津・藤光遺跡群 II」久留米市文化財調査報告書第 145 集 久留米市教育委員会
城門義廣編 2013 「東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 5 岩屋古墳群・上片島遺跡群」九州歴史資料館
熊代昌之はか編 2008 「日渡遺跡群 VI 正福寺遺跡第 7 次調査「遺構編」」久留米市文化財調査報告書第 272 集
久留米市教育委員会
栗原和彦編 1976 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 4 集」福岡県教育委員会
小林義彦はか編 1987 「野多目括渡遺跡 III」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 160 集 福岡市教育委員会
佐藤浩司編 2002 「重留遺跡第 6 地点」北九州市埋蔵文化財調査報告第 270 集 財団法人北九州市芸術文化振興財團
柴尾俊介編 1993 「上清水遺跡 I 区」北九州市埋蔵文化財調査報告第 130 集 財団法人北九州市教育文化事業団
中間研志はか編 1999 「貝元遺跡 II」福岡県教育委員会
前田義人はか編 2001 「長野小西田遺跡 2」北九州市埋蔵文化財調査報告書第 262 集 財団法人北九州市芸術文化振興財團
前田義人はか編 2005 「中貫ミカシキ遺跡 3 (3c 区・3d 区・4 区・7 区の調査)」北九州市埋蔵文化財調査報告書第 329 集 財団法人北九州市芸術文化振興財團
山口信義編 1989 「高津尾遺跡 1」北九州市埋蔵文化財調査報告書第 80 集 財団法人北九州市教育文化事業団
山村信榮編 1996 「太宰府・佐野地区遺跡群 VI」太宰府市の文化財第 31 集 太宰府市教育委員会

図 版



上片島遺跡群周辺航空写真(上から)

図版 2



1. 調査区全景(北から)



2. 調査区全景(南から)



1. 6-1 地区全景(南から)



2. 6-1 地区西壁(東から)



3. 6-2 地区全景(上から)



1. 6-2 地区 1 号住居跡北壁
(南西から)



2. 6-2 地区 1・5 号住居跡
(東から)



3. 6-2 地区 2 号住居跡カマド
(南から)



1. 6-2 地区 2 号住居跡
(東から)



2. 6-2 地区 6 号住居跡
(東から)



3. 6-2 地区 3 号土坑出土状況
(東から)



1. 6-2 地区 4 号土坑 (南西から)



2. 6-2 地区 5 号土坑出土状況
(北東から)



3. 6-2 地区 5 号土坑 (北東から)



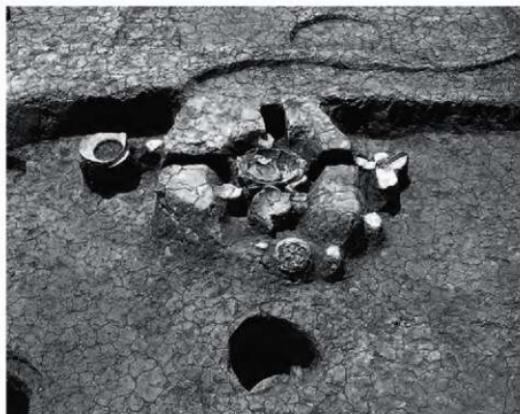
1. 6-2 地区西壁 (東から)



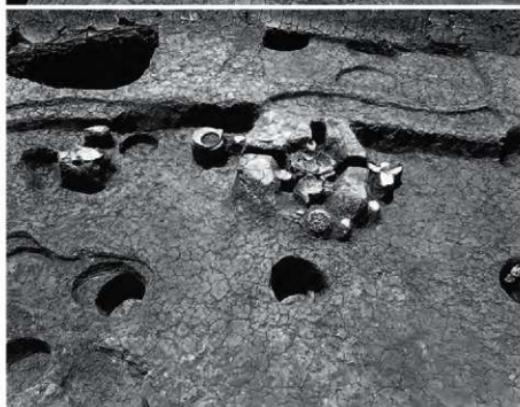
2. 6-3 地区全景 (上から)



3. 6-3 地区南壁 (北東から)



1. 6-3 地区 1 号住居跡カマド
(東から)



2. 6-3 地区 1 号住居跡出土状況
(東から)



3. 6-3 地区上段試掘トレンチ
(北から)



1. 6-4 地区全景 (上から)



2. 6-4 地区 1 号土坑
(東から)



3. 6-4 地区 2 号土坑ドングリ
出土状況 (東から)



1. 6-4 地区 2 号土坑 (東から)



2. 6-4 地区 3 号土坑 (西から)



3. 6-4 地区 5 号土坑 (東から)



1. 6-4 地区 6 号土坑(東から)



2. 6-4 地区 8 号土坑ドングリ
出土状況(東から)



3. 6-4 地区 7・8 号土坑
(東から)



1. 6-4 地区 9 号土坑出土状況
(北西から)



2. 6-4 地区 9 号土坑 (西から)



3. 6-4 地区 10 号土坑 (東から)



出土遺物①



23-4



25-9



23-6



25-10



23-8



25-11



25-5



25-12



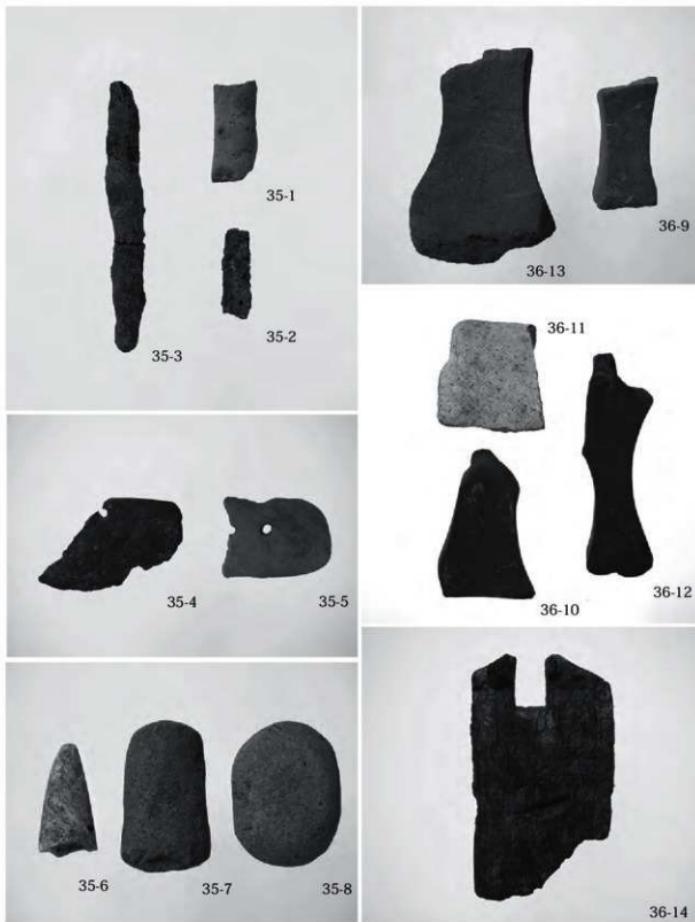
25-7



28-2



出土遺物③



出土遺物④

報告書抄録

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 26	登録番号 0006

上片島遺跡群 6 地区
福岡県京都郡苅田町上片島所在遺跡の調査

一般国道 201 号行橋インター関連関係
埋蔵文化財調査報告 第 2 集

平成 26 年 7 月 30 日

発行 九州歴史資料館

〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王 1 丁目 14-4